中學新國文典

上級用

42
815
服12

41833
教科書文庫
4
815
41-1937
20000
81514

資料室

文部省檢定濟
昭和十二年二月一日　中學校國語漢文科

教科書文庫
4
815
41-1937
2000081514

廣島高等師範學校
附屬中學校國語漢文研究會著

中學新國文典

上級用

京極書店發行

広島大学図書
2000081514

42
815
昭12

広島大学
教
81514
図書

例言

一　本書は昭和十二年三月改正の要目により、文語法を主とした文法を學習せしめる爲、中學校第三學年用の教科書として編纂したものである。

一　口語法と文語法との異同を知ることは、やがて我が國語の性質變遷を知ることになり、中學校に於ける文法學習上の重要な點であるから、混亂を來さないことを旨として、常に既習の口語文法との連絡を保ち、その異同をみづから發見させるが如き方法を取り得るやうに努めた。

一　文語活用語の活用形は、その各〻に就いての知識を要求することは出來ないのが實情であるが、出來る限り歸納的に學習し得るやう、例文を既習のものに採ることに努めた。

一　助動詞の分類は意味上の分類によつたのであるが、その記述の順序はやがて接續上の分類に一致するやうに努めた。

一　文章の構造に關する知識は極めて大切なことであるから、初年級で學習したものを基礎として、口語文及び文語文の兩者に就いて更に詳說することにした。

一　理論よりも實際に眞にわかるといふことをたつとぶがゆゑに、煩はしい說明を避け、例文を以て了解し得るやうにし、又各章練習題の外に自修題を提出し、卷末には文法全體に關する自修題を附して、餘裕ある者の練習に便した。

昭和十二年五月

著者識す

中學新國文典　上級用

目次

總說……一
第一編　單語篇（上）……二
第一章　名詞……二
第二章　代名詞……六
第三章　動詞……一一
第四章　形容詞……一三
第五章　形容動詞……一五
第六章　助動詞……一七
第七章　助詞……二〇

第八章　副　詞……三
第九章　接　續　詞……三五
第一〇章　感　動　詞……三七
第二篇　單　語　篇（下）……三九
第一章　文語動詞の活用形……三九
第二章　文語動詞の活用の種類……三五
一　四段活用……三五
二　上二段活用……三五
三　上一段活用……三六
四　下二段活用……三七
五　下一段活用……三八
六　カ行變格活用……三九
七　サ行變格活用……三九

八　ナ行變格活用……四一
九　ラ行變格活用……四二
第三章　文語動詞の識別法……四三
一　活用の種類を識別する法……四三
二　活用の假名遣を識別する法……四四
第四章　文語形容詞の活用……四八
第五章　文語形容動詞の活用……五三
第六章　文語用言の音便……五七
一　動詞の音便……五七
二　形容詞の音便……五八
第七章　文語助動詞の種類及び活用……六一
一　受身の助動詞……六一
二　可能の助動詞……六二

三　使役の助動詞……六三
四　崇敬の助動詞……六三
五　打消の助動詞……六五
六　時の助動詞……六六
七　願望の助動詞……六八
八　推量の助動詞……六九
九　咏嘆の助動詞……七一
一〇　指定の助動詞……七一
一一　比況の助動詞……七三
第八章　文語助動詞の接續……七六
他の品詞と助動詞との接續……七六
一　受身(可能・崇敬)の助動詞……七六
二　可能の助動詞……七七
三　使役(崇敬)の助動詞……七七

四　崇敬の助動詞……七八
五　打消の助動詞……七八
六　時の助動詞……七九
七　願望の助動詞……八〇
八　推量の助動詞……八一
九　咏嘆の助動詞……八二
一〇　指定の助動詞……八三
一一　比況の助動詞……八三
助動詞相互の接續……八四
第九章　文語助詞の種類……九〇
一　第一類……九〇
が　の　つ　を　に　へ　と　より　まで　にて……九一
二　第二類……九一
ば　とも　ど　ども　も　に　を　が　て　で　つゝ　ながら

三　第三類……九三
はばもぞなむやかこそ
しだにすらさへのみばかりなど
なな・そばやなむがなかなかも
かしよやもな
第一〇章　注意すべき文語助詞の用法……九六
一　に・へ……九六
二　ば……九六
三　ども……九七
四　ど・ども……九八
五　な・そ……九九
六　と……九九
七　だに・すら・さへ……一〇〇
八　ばや・なむ……一〇一

九　や・か……一〇二
一〇　係結の法則……一〇三
第一一章　文語の接頭語・接尾語……一〇八
一　接頭語……一〇八
二　接尾語……一〇九
第一二章　品詞の轉成……一一一
一　轉成の名詞……一一一
二　轉成の代名詞……一一三
三　轉成の動詞……一一三
四　轉成の形容詞……一一三
五　轉成の助動詞……一一三
六　轉成の副詞……一一三
七　轉成の接續詞……一一四
八　轉成の感動詞……一一五

第三篇　文章篇……一二
第一章　文の成分……一二
一　主語・述語……一二
二　補語……一三
三　修飾語……一四
四　獨立語……一六
第二章　文の成分の位置及び省略……一八
一　正常の場合……一八
二　倒置の場合……一八
三　省略の場合……一九
第三章　節……一三
從屬節の種類……一三
一　體言節……一三

二　用言節……一四
三　形容詞節……一四
四　副詞節……一四
第四章　主部・述部・補部・敍述部……一六
一　主部……一六
二　述部……一六
三　補部……一九
四　敍述部……一九
第五章　文の種類……一四
一　單文……一四
二　複文……一四
三　重文……一四
自修題補遺……一四七

附錄
文法上許容ニ關スル事項
表
動詞活用表
形容詞活用表
形容動詞活用表
文語動詞活用識別表
文語動詞假名遣識別表
文語用言音便表
助動詞の種類・活用及び接續表

目次終

中學新國文典 上級用

總說

我が國は萬世一系の天皇を戴けり。

右の例のやうに、文章にのみ用ひる特別の國語を**文語**といふ。文語でも口語と同じく一つの纏つた思想を表してゐるものを**文**といひ、これを分解すると、右の傍線を施した部分のやうに、それぞれ一つの意味又は働をもつた單位の言葉卽ち**單語**又は**語**に分れる。

我が國・萬世一系の天皇・戴けりのやうに、幾つかの單語が集つて

文語
文
單語

連語　一つの意味をなしてゐるものを**連語**といふ。

品詞　單語は文語でも口語と同じくその意味・働・形等の上から次の十種に分け、その各、を**品詞**といふ。

名詞　代名詞　動詞　形容詞　形容動詞　助動詞
助詞　副詞　接續詞　感動詞

第一篇　單語篇（上）

第一章　名詞

一　源氏物語は、紫式部の著したる小説なり。

二　富士山は世界に於ける名山なり。

名詞　三　昭和の御代に生まれたるこそ有難けれ。

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の名稱をいふ語を**名詞**といふ。

固有名詞　名詞の中、右の二重傍線を施した語のやうに、人名・地名・書名・年號等をあらはす名詞を**固有名詞**といひ、一重傍線を施した語のやうに、一般の名詞を**普通名詞**といふ。

普通名詞　「太閤」「黄門」等は元來普通名詞であるが、それが特に「豐臣秀吉」「德川光圀」等を指す場合は固有名詞である。

一　わが望むところは健康のみ。

二　それはいと口惜しきことなり。

三　思ひ出づるまゝを書けり。

四　君の爲に盡くさん。

五言ふべきものに非ず。

右の例の傍線を施した語も亦名詞として取扱ふ。

數詞

名詞の中、「ひとつ」「五」「二分の一」「一メートル」「三本」「四月一日」「第一番」のやうに、事物の數量又は順序をあらはす語は、特に數詞と呼ぶ。

練習題

次の文中から名詞を選び出し、其の種類をいへ。

(1) 東大寺の金堂は天空高く聳えて、五丈三尺の大佛千二百年の面影を殘せり。

(2) 桓武天皇の御時都を今の京都に遷されたり。

(3) 天和元年に至りて、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。

(4) 渡邊競は源三位入道頼政の士には第一のものなり。

(5) 花にも月にも、喜にも悲にも、まづ思ひ出でらるゝは故郷なり。

(6) 歴史は長し七百年、興亡すでに夢に似て、英雄墓は苔むしぬ。

(7) 月なゝめなる時計臺、二つの針の重なりて、打つも重しや時の數。

(8) 嚴島は日本三景の一に數へられて名高し。

(9) 一切經は卷數幾千の多きに上り出版は容易の事業にあらず。

(10) 人は食ふために働くにあらず、生きんが故のみ。

代名詞
人代名詞
指示代名詞
自稱
對稱
他稱
不定稱

第二章　代名詞

われ・汝・彼・此處・其處・彼方などのやうに、人・事物・場所・方向の名目の代りに使つてそれを指示する語を**代名詞**といふ。

代名詞の中、人の名の代りに使はれるものを**人代名詞**といひ、事物・場所・方向を指示するものを**指示代名詞**いふ。

一　人代名詞

人代名詞は、其の指示するものによつて、左の四つの稱に分ける。

自稱……自分を指す語
對稱……相手を指す語
他稱……第三者を指す語
不定稱……不定のものを指す語

近稱・中稱
遠稱・不定稱

自稱	對稱	他稱	不定稱
わ われ（吾） おのれ 僕	な（なれ） なんぢ（汝） そなた 君	こ これ そ それ あ あれ か かれ（彼）	た たれ（誰） なにがし

二　指示代名詞

指示代名詞は、其の指示する事物・場所・方向の遠近によつて、**近稱・中稱・遠稱・不定稱**の四つの稱に分ける。

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ これ	そ それ	あ あれ か かれ	なに どれ いづれ

場所	方向
ここ	こなた　こちら
そこ	そなた　そちら
あそこ　あしこ　かしこ	かなた　あなた　あちら
いづこ　いづく	いづかた　いづちら

この・その・かの・あの は本來代名詞こ・そ・か・あに助詞のが添うたものであるが、一語としてその下に來る體言を指すだけに用ひられる場合が多く、他の代名詞と稍〻意味の上に差のある場合がある。但し便宜上一代名詞として取扱つてよい。

名詞・代名詞を體言といふ。

練習題

次の文中から代名詞を選び出し、其の種類・稱をいへ。

(1) 彼は白金其の他の金屬の針金を以て樣々の實驗を重ねしが、これまた失敗に終りぬ。

(2) 我若し彼の地にて死したりと聞かば、汝必ず之を持歸りて、日本の役所に屆出づべし。

(3) 彼方此方殘るくまなく探し求めき。

(4) 余は親しく彼等の崇嚴なる數分間の問答を聽けり。

(5) 諸子よ、諸子は嘗て死を考へしことありや。

(6) 嗚呼、別れたる我が友、今何處にかある。

(7) 彼處に行きて彼の畫師のする樣を見給へ。

(8) 我は此處に我が友と相語りつゝ今宵一夜をあかさん。

(9) そなたには恙なくお暮しなされ候や。
(10) 御身いかなる人にましますかや。
(11) 僕足下の言を用ひず、此の失敗に陥る。あゝ誰をか恨み何をかとがめん。
(12) それがしなほ一言あり、打げて聞きたまへ。
(13) 汝は誰そ。そを何處にか負ひて行く。
(14) かの殿は狩のかへるさに、工藤とかやに討たれ給ひぬ。
(15) 人の馬にはおのれ乘り、おのれの馬には人乘れり。
(16) あちこちと歩きて喉乾きたり。

動詞
自動詞
他動詞

第三章　動詞

一 春も過ぎ、はや夏來りぬ。
二 書を讀み、文を作る。
三 成功を喜び、失敗を悲しむ。
四 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり。
五 彼の功多きに居る。

右の例の傍線を施した語のやうに、主として事物の動作又は存在をあらはす語を**動詞**といふ。

動詞の中、過ぐ・來るの如く、自然の動作をあらはすものを**自動詞**、讀む・作る・喜ぶ・悲しむの如く、その動作を受ける目的の語を有つものを**他動詞**と呼ぶことがある。

練習題

次の文中から動詞を選び出し、且其の自動・他動を區別せよ。

(1) 雪の日の夕暮近き頃、上州佐野の里に、つかれし足の歩重くたどりつきたる旅僧あり。

(2) 雨傘さして汽車を眺むる里人も見えたり。

(3) 山を越え河を下り、湖を渡りて一村に出づ。

(4) たまゝ大阪に出水あり。家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。

(5) やがて運び來れる貧しき膳に向かひ、僧は喜びて箸を取りぬ。

(6) 松下禪尼は手づから障子の破れをつくろひゐたり。

第四章　形容詞

一　山高く、水深し。

二　我がなつかしき住家見ゆ。

三　この花は色美しけれど香なし。

右の例の傍線を施した語はすべて、事物の性質又は狀態をあらはす語である。事物の性質又は狀態をあらはす語は他にもあるが、いひ切る場合に、口語ならばい、文語ならばしとなるものを**形容詞**といふ。

存在をあらはす有りは動詞であるが、存在せぬことをあらはす無しは形容詞である。

練習題

次の文中から形容詞を選び出せ。

(1) 蒲公英（たんぽゝ）　菫　などの　咲ける　を　見つゝ　ゆくも　樂し。

(2) 行く　は　何處　ぞ、桃　咲く　村　へ。今日　は　うれしき　遠足　の　日　よ。

(3) 近き　船　は　行け　ども、遠き　帆影　は　動かん　とも　せず。

(4) 年　若き　日　に　勉め　ざれ　ば、老いて　後、悔ゆる　こと　多し。

(5) 彼　は　富め　ども、我　は　貧し。

(6) 山中　の　賊　を　破る　は　易く、心中　の　賊　を　破る　は　難し。

(7) 物事　は　始　わろけれ　ば　終も　わろく、始　よろしけれ　ば　終も　よろし。

形容動詞
用言

第五章　形容動詞

一　明日は天氣よからん。

二　今日は波いと靜かなり。

三　威風堂々たり。

右の例の傍線を施した語のやうに、意味は形容詞と同じく事物の性質又は狀態をあらはしてゐるが、形はラ變の動詞と似てゐるものを**形容動詞**といふ。

動詞・形容詞・形容動詞を**用言**といふ。

練習題

次の文中の形容動詞を指摘せよ。

(1) 場に臨みて平然たり。

(2) 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。
(3) 效果空しからずして宿志の果さるゝも近きにあらんとす。
(4) ブラジルはコーヒーの主要なる産地なり。
(5) 見渡す限り茫々たる原野なりき。
(6) 町のりつぱなることも他に比して優ることも劣ることなし。
(7) 校長も溫厚なる人にして、生徒を愛することは子の如し。
(8) 橘中佐は部下をあはれむ心深かりき。
(9) よからぬ業をして、人を苦しむることなかれ。
(10) 皎々たる明月今や滿地を照しぬ。

第六章　助動詞

一　間宮林藏の探檢によりて、樺太は大陸の一部にあらざることは明白となりき。

二　苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も殘らずなりぬ。

右の例の傍線を施した語のやうに、動詞に添うて其の意義を助け、色々な意味をあらはす語を**助動詞**といふ。

助動詞は主として動詞に添うて其の意義を助けるものであるが、次の場合のやうに他の品詞に添ふこともある。

名詞・代名詞に添ふ場合

學生たる者は須く勉強すべし。

我を知る者は彼なり。

形容詞・形容動詞に添ふ場合

櫻は散るが面白きなり。

來ること遲かりき。

他の助動詞に添ふ場合

彼が多年の苦心は遂に報いられたり。

助詞に添ふ場合

落花雪の如し。

天馬空を行くが如し。

かやうに助動詞は、動詞・名詞・代名詞・形容詞・形容動詞・助詞・又は他の助動詞に添うて、その意義を助けるものである。

練習題

次の文中傍線のある語はみな文語の助動詞である。その意味を口語でいへ。

(1) 春は春季皇靈祭を行はせらる。（られる）

(2) 彼の熱心は、強く人々を感動せしめし（させ・した）にや、寄附するもの意外に多かりき。（た）

(3) 彼は單身樺太におもむけり。（た）

(4) 鹿の人なつかしげに寄り來るは、奈良には缺くべからざる風情なるべし。（ない・であるだろう）

(5) 夜もいとふけ、月も既に入りぬ。（た）

(6) 國に母をや殘すらん、彼のまぶたに露ありき。（であろう・た）

(7) 頼朝義經に義仲を攻めさす。（させる）

第七章　助　詞

一　雨だに降らずば行くべし。

二　東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。

三　問はるれども答へず。

四　これを持ちて東京まで行けよかし。

右の例の傍線を施した語のやうに、種々の語に添うて他の語との關係をあらはす語を**助詞**といふ。

練習題

次の文中から助詞を選び出せ。

(1) 波にたゞよふ氷山も、來らば來れ恐れんや。

(2) はるゞゝと風のゆくへの見ゆるかなすゝきがはらの秋の夜の月。

(3) 夢にのみ見し山川も、あけくれしたひし家も、近く迫りぬ。

(4) 君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで。

(5) 停車場の外に出づれば、秋晴の空すみて暖さ春の如し。

(6) 今こそ君は其の良馬を求めて、主君のおほめにあづかり給へ。

副

第八章　副　詞

一　春雨しと〳〵と降る。

二　感いよ〳〵深し。

三　波いと靜かなり。

右の例のしと〳〵とは降るといふ動詞を修飾し、いよ〳〵は深しといふ形容詞を修飾し、いとは靜かなりといふ形容動詞の意味を修飾してゐる。かやうに用言を修飾する語を**副詞**といふ。

一　彼はやゝ暫し考へゐたり。

二　僅か一米の差にて敗れたり。

右の例のやうに、副詞はまた、他の副詞又は名詞の意味を修飾することもある。

一　忽ち風吹出でたり。

二　月明かくして恰も晝の如し。

右の例のやうに、副詞は又其の下の文又は連語全體を修飾することもある。

かやうに、副詞は、動詞・形容詞・形容動詞・名詞・他の副詞・文又は連語等の意味を修飾するものである。

練習題

一、次の文中から副詞を選び出し、その修飾してゐる語を示せ。

(1)　梅花も白きはすでに過ぎんとし、椿は花葉よりも多く、ぼて〳〵と早や落初めぬ。

(2)　汽車はいと徐に動き始めぬ。

(3) 案内の人に導かれて、まづ社務所の隣なる舊御殿を拜觀す。

(4) 文天祥戰に敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

(5) 立木極めて少かりしかば、更に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

(6) 容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人々に怪しまれ、なぶりものにせられて、或は命も危かるべし。

二、次の副詞を使つて短文を作れ。

あたかも　やがて　恐らく　豈　たゞ　いづくんぞ

第九章　接續詞

一　山又山を打越えたり。

二　吹雪はげしかりき。されど、屆せず進みぬ。

三　書を讀み、且、字を習ふ。

右の例の傍線を施した語のやうに、その前後の語・連語又は文を接續する語を**接續詞**といふ。

練習題

一、次の文中から接續詞を選び出せ。

(1) 兩岸及び島々、見渡す限り田園よくひらけてまうせんをしけるが如し。

(2) 本日は南又は西の風、晴。但し午後曇。

(3) 富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるにあらざれば、我之に居らず。

(4) 吉野に遊び、ついで高野にのぼれり。

(5) 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。然るに之を解決したる人遂に我が日本人の中より現れぬ。

(6) 筆或は鉛筆にてしたゝむべし。

(7) 孔子は廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。しかも遂に志を達することを得ざりき。

二、次の接續詞を使つて短文を作れ。

故に　もしくは　したがつて　されば

感動詞

第一〇章　感動詞

一　嗚呼、悲しいかな。

二　あはれ、友は此の世を去りぬ。

三　いざや、行かん。

四　やよ、正行、わが言ふことを聞け。

右の例の傍線を施した語のやうに、感動した場合に覺えず發する語や、呼びかけ・應答の語を**感動詞**といふ。

「あゝ悲しいかな」「あな面白の樂の音や。」のあゝ・あなは感動詞であるが、かな・や等は感動の意をあらはす助詞である。即ち感動詞は、獨立した發聲の語だけをいふのである。

練習題

次の文中から感動詞を選び出せ。

(1) いざや我が友うち連れ行かん。今日はうれしき遠足の日よ。

(2) すは敵の大軍の押寄せたるぞ。

(3) 「いや〳〵、おのれの心にてはあるまじ、誰に教へられて來れるぞ。」「いな、教へられたるには候はず。」

(4) あなあさましの御姿や。

(5) いで大船を乘出して、我は拾はん海の富。

(6) いざ立寄りて見て行かむ。

(7) いかに與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。

第二篇　單語篇（下）

第一章　文語動詞の活用形

咲（さ）

か	……ず　む
き	……始む　て　たり
く	
く	……こと　花
け	……ども　ば
け	

起（お）

き……ず　む
き……出づ　て　たり
く
くる……こと　人
くれ……ども　ば
きよ

消（き）

え……ず　む
え……始む　て　たり
ゆ
ゆる……こと　雪
ゆれ……ども　ば
えよ

射

い……ず　む
い……切る　て　たり
いる
いる……こと　人
いれ……ども　ば
いよ

蹴

け……ず　む
け……倒す　て　たり
ける
ける……こと　人
けれ……ども　ば
けよ

來

こ……ず　む
き……始む　て　たり
く
くる……こと　人
くれ……ども　ば
こよ

爲

せ……ず　む
し……終る　て　たり
す
する……こと　人
すれ……ども　ば
せよ

死（し）

な……ず　む
に……絶ゆ　て　たり
ぬ
ぬる……こと　人
ぬれ……ども　ば
ね

有（あ）

ら……ず　む
り……がたし　て　たり
り
る……こと　人
れ……ども　ば
れ

活用　語幹　語尾　活用形　未然形

右の例のやうにして、すべての動詞をしらべると、文語の動詞も口語と同じく、

一　大部分の動詞には、變化する部分と變化せぬ部分がある。

二　動詞の變化する場合には、その中に必ず五十音圖の同行の音をもつてゐる。

三　動詞は使ひ方によつて六つの形に變化する。

といふことがわかる。

かやうに、動詞の形の變化することを**活用**といひ、變化せぬ部分を**語幹**、變化する部分を**語尾**といひ、又動詞の活用の六つの形を**活用形**といふ。

第一形　主として助動詞ず・む等に續けて動作が未だ然うなつてゐない意をあらはす形であるから**未然形**といふ。

連用形　中止形　終止形　連體形

第二形　主として用言に連なる形であるから**連用形**といふ。

この形はまた助動詞たり・助詞て等に連なる。

一　書を讀み、字を習ふ。

二　父は畠に出で、子は山に行く。

右の例のやうに、連用形は、又文意を中止して下に續ける爲に使はれる形である。この場合特に**中止形**と呼んでゐる。

喜　悲　遊　光　教

連用形は又右の例のやうに、轉じて名詞となる形である。

第三形　主として文意を終止する爲に使はれる形であるから**終止形**といふ。

第四形　主として體言に連なる形であるから**連體形**といふ。

第五形　主として助詞ども・ば等に續けて、動作が已に成立つて

已然形

命令形

ゐる意をあらはす形であるから**已然形**といふ。これは口語とはちがふ。

第六形　專ら命令の意をあらはす爲に使はれる形であるから**命令形**といふ。

練習題

次の語を活用させよ。

強ふ　得ウ　延ぶ　着る　覺す　覺む　覺ゆ　恥づ

消ゆ　流る　煮る　吼ゆ　有り　交ゆ　交る　來キタる　用ふ

混ズ　來ク　懲る　爲ス　死ぬ　死す　報ゆ

堪ふ　居キる　老ゆ　蹴る　落つ　落す　植う　顧みる

四段活用

上二段活用

第二章　文語動詞の活用の種類

一　四段活用

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
咲く	か	か	き	く	く	け	け
降る	ふ	ら	り	る	る	れ	れ

右の例のやうに、五十音圖の**ア・イ・ウ・エ**の四段に活用するものを四段活用といふ。

文語四段活用の動詞は、五十音圖の**カ**(ガ)・**サ・タ・ハ**(バ)・**マ・ラ**の各行にある。

文語四段の活用は口語と同じである。

二　上二段活用

上一段活用

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
起く	お	き	き	く	くる	くれ	きよ
悔ゆ	く	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ

右の例のやうに、五十音圖の**イ・ウ**の二段の音と、それに連體形に「る」、已然形に「れ」、命令形に「よ」が添うたものとで活用してゐるものを上二段活用といふ。

文語上二段活用の動詞は、五十音圖の**カ**(ガ)・**タ**(ダ)・**ハ**(バ)・**マ**・**ヤ**・**ラ**の各行にある。文語上二段の活用は口語では上一段となる。

三　上一段活用

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
射る	(い)	い	い	いる	いる	いれ	いよ
見る	(み)	み	み	みる	みる	みれ	みよ

下二段活用

右の例のやうに、五十音圖の**イ**の段の音と、それに終止形と連體形に「る」、已然形に「れ」、命令形に「よ」が添うたものとで活用してゐるものを上一段活用といふ。

文語上一段活用の動詞は、五十音圖の**ア・カ・ナ・ハ・マ・ワ**の各行にある。文語上一段の活用は口語でも同じであるが、語數は極めて少く、語幹と語尾との區別のつかぬものが多い。

四　下二段活用

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
得	(う)	え	え	う	うる	うれ	えよ
棄つ	す	て	て	つ	つる	つれ	てよ

右の例のやうに、五十音圖の**ウ・エ**の二段の音と、それに連體形に「る」、已然形に「れ」、命令形に「よ」が添うたものとで活用してゐるもの

下一段活用

正格活用

を下二段活用といふ。

文語下二段活用の動詞は、五十音圖の各行及び**ガ・ザ・ダ・バ**の各行にある。文語下二段の活用は口語では下一段となる。

五　下一段活用

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
蹴る	(け)	け	け	ける	ける	けれ	けよ

蹴るといふ動詞は、右のやうに、五十音圖の**エ**の段の音と、それに終止形・連體形にる、已然形にれ、命令形によの添うたものとで活用してゐる。この活用を下一段活用といふ。

文語下一段活用の動詞は、蹴るといふ一語だけであるが、口語と同じく、今は蹴らず・蹴りたりのやうに、四段活用に使はれることもある。

以上五種の活用を**正格活用**といふ。

カ行變格活用

サ行變格活用

六・カ行變格活用

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
來	(く)	こ	き	く	くる	くれ	こよ

來といふ動詞は、右のやうに、五十音圖の**イ・ウ・オ**の三段の音と、それに連體形にる、已然形にれ、命令形によの添うたものとで活用してゐる。この活用をカ行變格活用(略してカ變)といふ。

文語カ變の動詞は來といふ一語だけであるが、文語と口語とでは終止形・命令形がちがふだけである。

七　サ行變格活用

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
爲	(す)	せ	し	す	する	すれ	せよ

爲（ス）といふ動詞は、右のやうに、五十音圖のイ・ウ・エの三段の音と、それに連體形にる、已然形にれ、命令形によが添うたものとで活用してゐる。この活用をサ行變格活用（略してサ變）といふ。

文語サ變の動詞は、元來すといふ一語だけであるが、他の語にすが添うて、多くのサ變の動詞が出來る。例へば

勉強す　登山す　發明す　解釋す
發す　達す　罰す　製す
報ず　講ず　論ず　感ず
旅す（タビ）　罪す　位す　心す
全うす　辱うす　高うす　空しうす
先んず　疎んず　重んず　輕んず
新にす　恣にす　專らにす　審にす

ナ行變格活用

コーチす　タッチす　スケッチす

文語と口語とでは未然形・終止形・命令形がちがふ。

八　ナ行變格活用

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
死ぬ	し	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

死ぬといふ動詞は、右のやうに、五十音圖のア・イ・ウ・エの四段の音と、それに連體形にる、已然形にれが添うたものとで活用してゐる。この活用をナ行變格活用（略してナ變）といふ。

文語ナ變の動詞は、死ぬの外往（イ）ぬといふ語があるが、往ぬは今は方言の外は使はれない。

文語のナ變死ぬは口語のやうに四段に使つてよい。

ラ行變格活用

九　ラ行變格活用

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
有り	あ	ら	り	り	る	れ	れ

有りといふ動詞は右のやうに四段活用と同じく五十音圖のア・イ・ウ・エの四段に活用するが、終止形がちがふ。この活用をラ行變格活用(略してラ變)といふ。

ラ變の動詞は、有りの外、居り・侍りといふ二語があるが、今は居りが四段に使はれる外、あまり使はれない。

文語のラ變は口語では四段となる。

以上四種の活用を變格活用といふ。

文語動詞の活用には以上の九種がある。

變格活用

第三章　文語動詞の識別法

一　活用の種類を識別する法

語數が少くて暗記するとよいもの。

上一段　射る　鑄る　著る　似る　煮る　干る　見る
(顧みる・惟みる・鑑みる・試みる)　居る　率ゐる

下一段　蹴る

カ變　く(來)

サ變　す(爲)　他語にすの添うたもの。

ナ變　死ぬ　(往ぬ)

ラ變　有り　(居り)　(侍り)

右の外は

四段　打消のずがアの段の音に添ふ。　讀ま……ず。
上二段　打消のずがイの段の音に添ふ。　落ち……ず。
下二段　打消のずがエの段の音に添ふ。　消え……ず。

二　活用の假名遣を識別する法

(イ)　ア行・ハ行・ヤ行・ワ行の識別法

ア行　射る　鑄る……上一段
得……下二段
ワ行　居る　率ゐる……上一段
植う　飢う　据う……下二段
ヤ行　終止形がゆとなるもの。
右の外はすべてハ行活用である。

(ロ)　ザ行・ダ行の識別法

ザ行　1　混ず……下二段
2　サ變動詞中の講ず・論ず・重んず等のやうに語尾の濁るもの。
右の外はすべてダ行活用である。

練習題

次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

(1)　御生前御好みありし品を携へ來て、神前にさゝげたしと願ひ出づる者多し。

(2)　名古屋の天守閣には棟の兩端に金のしやちほこあり。其の高さ八尺五寸、朝日夕日に輝きて、遠く數里の外より望み見ることを得べし。

(3) 畫師は夜もすがら寢ねずして、明日はかく畫がかんなど獨言してゐたり。

(4) 喜捨を受けたる此の金を、一切經に費すも、飢ゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。

(5) 雄鷄は箱のふちをふまへて、首をすゑ、胸を張り、今やときをつくらんとする樣なり。

(6) 春は來りぬ。越路の雪も解初めたれば、柴田勝家先づ佐久間盛政をして一萬五千の兵を率ゐ、近江に出でしむ。

自修題

一、次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

(1) 那須餘一は空飛ぶ鳥も三羽に二羽は、必ず射落す程の上手なり。

(2) すべて物は破れたる時つくろへば、しばらくはなほ用をなすものぞ。

(3) 或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を經たり。

(4) 机上に形珍しき一本の團扇あり。何心なく手に取りて眺めゐたりし彼の眼は異樣に輝きぬ。

二、次の文中の假名遣の誤を正せ。

(1) 望も遂に絶へ果てたり。

(2) 飢ゆとも食を乞わず。

(3) 教ゆるは學ぶの半ばなり。

(4) 血の流るゝをも覺へざりき。

(5) 田を植ふる乙女の歌遙に聞ゆ。

(6) 老ひて益壯なり。

第四章　文語形容詞の活用

高（たか）

- く……ば
- く……聳ゆ　て
- し
- き……こと　山
- けれ……ども　ば
- ○

樂し（たのし）

- く……ば
- く……遊ぶ　て
- ○
- き……こと　日
- けれ……ども　ば
- ○

右の例でわかるやうに、文語形容詞は

一カ行・サ行の兩行に跨がつて活用する。

二命令形はない。

シク活用
ク活用

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然
高し	たか	く	く	し	き	けれ
樂し	たのし	く	く		き	けれ

語幹にしの有るものを**シク活用**といひ、無きものを**ク活用**といふ。シク活用では終止形にその語幹を用ひる。

文語形容詞は口語とはその活用がちがふ。

中止形

一夏は暑く、冬は寒し。

二雨はげしく、風強し。

副詞形

右の例のやうに、形容詞の連用形は、動詞の場合と同じく**中止形**にも用ひられるが、又次の例のやうに、副詞の働をする場合が多いので、これを**副詞形**ともいふ。

一水清く流る。

二　花あわたゞしく散れり。

練習題

一、次の文中から形容詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

(1) 價高くば買ふこと難からん。

(2) 炭もなく薪もなきに、焚きて暖を取らん由もなく、軒に垂るゝ氷は、とぎすませる刀に似てすさまじ。

(3) もみつがは伸び縮みすること著しきを以て用途甚だ狹し。

(4) 一豐(かつとよ)はわけて家も貧しければ、心にたゞ欲しと思ふのみにて空しく家に歸りぬ。

(5) 松青く樓門赤く、茶煙絶えぐにあがりて、花極めて白し。

(6) 朝夕は凌ぎやすけれども日中は堪へ難し。

二、次の形容詞を活用させよ。

鋭し　羨まし　悲し　勇まし　かひぐし　おびたゞし
神々し　暗し　明かるし　淋し　うやうし

自修題

次の文中から形容詞を選び出し、其の種類と活用をいへ。

(1) 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。なぎさの松に吹く風を、いみじき樂と我は聞く。

(2) 枇杷はうまけれども種子大きく肉少きは惜し。

(3) 死は鴻毛より輕く、義は泰山より重し。

(4) うるはしき眞玉白玉、香よき木の實草の實、うづたかき積荷の中に海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。

(5) さて〳〵、金なければせん方なけれど、あれ程の名馬、武士として手に入れたきものなり。

(6) 何れおとらぬ馬多く集り來れる中に、一きは目立ちてたくましき馬なりき。

(7) けやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生ず。

(8) 金色に咲きこぼれ枝々にこぼれ匂ひて、もくせいのゆかしきかをり。なつかしき師の君を、見送りし去年(こぞ)の今頃、此の花の盛りなりけり。

第五章　文語形容動詞の活用

烈し

から	ず
かり	き
く	
○	
かる	べし
○	
かれ	

靜か

なら	ず
なり（に）	き
なり	
なる	こと
なれ	ば
なれ	

堂々

たら	ず
たり（と）	き
たり	
たる	こと
たれ	ば
たれ	

右の例のやうに、文語の形容動詞には三種あつて、其の活用は略、ラ變の動詞と同じである。

但し、文を中止する場合にはラ變の動詞とちがつて、次のやうな言ひ方をする。

一　山高く、水深かりき。

二　風靜かに(して)、波穩やかなり。

三　語氣凛然と(して)態度堂々たり。

形容動詞の中、語の末がかりとなるものをカリ活、なりとなるものをナリ活、たりとなるものをタリ活と呼ぶ。

種類	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
カリ活	(烈しかり)	烈し	から	かりく		かる		かれ
ナリ活	靜かなり	靜か	なら	なりに	なり	なる	なれ	なれ
タリ活	堂々たり	堂々	たら	たりと	たり	たる	たれ	たれ

カリ活
ナリ活
タリ活

文語の形容動詞は口語とは、その種類・活用がちがふ。

練習題

次の文中から形容動詞を選び出し、その活用を言へ。

(1)　海の靜かなることは鏡の如く、朝日夕日を負ひて島がくれゆく白帆の影ものどかなり。

(2)　エヂソンは例の如く實驗室にこもりて研究に餘念なかりき。

(3)　天勾踐を空しうするなかれ。時、范蠡無きにしもあらず。

(4)　身なりはそまつなりしが氣品高かりき。

(5)　障子の切張はまだらになりて見苦しからん。とゞくく張りかへ給へ。

(6) 渺々たる　大海　に　漕出づる　心地　いはん　方　なし。

(7) 月　明らかに、星稀なり。

自修題

次の文中から形容動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

(1) 御手傳を願ひ出づる者多かりしかば、何れも十日を限りて土木に從事せしめたり。

(2) 今まで荒れに荒れゐたる大海、おのづから靜まりて、おだやかなる凪(ナギ)となれり。

(3) 勉强も大切なれども身體も大切なり。

(4) 夏は山海皆緑にして、目覺むるばかり鮮かなり。

(5) 如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだてを成就せん。

音便
イ音便
ウ音便

第六章　文語用言の音便

一　動詞の音便

或語が他の語に續く場合、發音の便宜上その音が變化することがある。これを**音便**といふ。文語動詞の音便は、その連用形から助詞のてに續く場合に起る。

文語助動詞たりに續くものは、今日普通には使はれない。口語では助詞て・たり、助動詞たに連なる場合に起る。

イ音便　き・ぎがいに轉ずる場合

咲きて……咲いて　　泳ぎて……泳いで

ウ音便　ひがうに轉ずる場合

買ひて……買うて

撥音便

促音便

撥音便　に・び・みが撥音のんに轉ずる場合

死にて……死んで　飛びて……飛んで

踏みて……踏んで

促音便　ち・ひ・りが促音のつに轉ずる場合

勝ちて……勝つて　買ひて……買つて

賣りて……賣つて

ぎ・に・び・みが音便になる時は、次に來るてはゴ音となる。

文語動詞の音便は、サ行以外の四段及びナ變・ラ變の連用形に起る。

二　形容詞の音便

イ音便　文語形容詞の連體形がいとなる場合

あゝ悲しきかな。……あゝ悲しいかな。

美しきかな。……美しいかな。

ウ音便　文語形容詞の連用形がうとなる場合

山高くして。……山高うして。

若くして死す。……若うして死す。

口語形容詞ではウ音便だけである。

練習題

次の文中の音便を示し、其の種類をいへ。

(1) 船をやとうて木曾川を下る。激流岩を嚙んで心を寒からしむ。

(2) 朝に星を戴いて出で、夕に月を踏んで歸る。

(3) 救はんとすれど、悲しいかな我が力及ばず。

(4) 常世(つねよ)は時こそ來れと、瘦馬に鞭うつてはせつく。

(5) 仰いで天に愧ぢず、俯して地に愧ぢず。

自修題

一、次の文中の音便を示し、其の種類をいへ。

(1) 發憤しては食を忘れ、樂しんでは憂を忘る。

(2) 主人はからうじて僧をともなひ歸れり。

(3) こは如何に、降つてわいたる敵の大軍、滿ち〳〵たり。

(4) 清正手早くかぶとの緒を切つたりけり。

(5) 「すは勝つたるぞ」と手を打つて喜びけり。

二、次の文の誤を正し、其の理由をいへ。

(1) 重荷を負ふて遠き道を行くが如し。

(2) 天を仰ひで嘆息せり。

(3) 山紫に水清ふ、大和は歌によいところ。

(4) 新聞を讀むで後行くべし。

受身の助動詞

可能の助動詞

第七章　文語助動詞の種類及び活用

一　受身の助動詞　る・らる

人に敬はる。

賊、捕へらる。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

二　可能の助動詞　る・らる・べし・べかり

此の書は、我にも讀まる。

何人にも解せらる。

る・らるの活用は受身の場合と同じである。但し、命令形は

自發の助動詞

ない。

一　待たるゝものは鶯の聲。

二　母の事のみ思ひ出でらる。

右の例のやうに、可能の助動詞は、また動作の自然に起る意味にも用ひられる。之を特に**自發の助動詞**ともいふ。

右の外に、推量の助動詞から轉じて可能の意をあらはす語にべし・べかりがある。

此の山は、容易に登る：べし。

危險にして、近づく：べから：ず。

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
べかり	べから	べかり				

使役の助動詞

べかりの未然形に打消のずがつく時は、右の例のやうに不能の意をあらはす外に、禁止の意をもあらはす。

花を折る：べから：ず。

三　使役の助動詞　す・さす・しむ

弟に字を習は：す。

犬を子供に馴れ：さす。

賴朝、義經をして義仲を攻め：しむ。

崇敬の助動詞

四　崇敬の助動詞　る・らる・す・さす・しむ

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

父、東京に行か：る。
先生は、本日缺席せ：らる。
殿下、臨幸あら：せ：らる。
皇后陛下、日光に行啓せ：させ：給ふ。
天皇陛下には、親しく觀兵式に臨ま：しめ：給ふ。

る・らるは受身、す・さす・しむは使役の場合とその活用が同じである。

す・さす・しむは右の例のやうに、下にらる・給ふ等の添ふ場合が多い。隨つて今は未然形・連用形の外は餘り使はれない。

崇敬の意をあらはすには、右のやうな助動詞の外に、給ふ・おはします・ましします・奉る・侍り・候といふやうな動詞が轉じて使はれる。此の場合は助動詞として取扱ふ。

打消の助動詞

殿下、槍ヶ嶽に登り：給ふ。
母宮もなげき：おはします。
皇大神は此の處に鎭り：ましまします。
幼より養ひ：奉る。
かくて夜を明かし：侍り。
ありがたく頂戴仕り：候。

五　打消の助動詞　ず・ざり・じ・まじ

風吹か……ず。
……ざり……き。
……じ。
風吹く……まじ。

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
ざり	ざら	ざり		ざる	ざれ	ざれ
じ			じ	じ	じ	
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	

じ・まじは、右の例のやうに打消の推量の意となる外に、決意をもあらはす。

再び過失を繰返さ：じ。（繰返す：まじ）

六　時の助動詞

（イ）未來の助動詞　む

明日は雨晴れ：む。

時の助動詞

未來

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む			む	む	め	

むは今日の文章中ではんと書く。

（ロ）完了の助動詞　ぬ・つ・たり・り

花咲き：：：ぬ。
：：：つ。
：：：たり。

花咲け：：：り。

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	
り	り	り	（り）	る		

完了

過去

(ハ) **過去の助動詞　き・けり**

鐵眼といふ僧あり…き。

出行き…けり。

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き			き	し	しか	
けり			けり	ける	けれ	

願望の助動詞

七　願望の助動詞　たし・まほし

今日は靜養し…たし。

月見に行か…まほし。

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	

推量の助動詞

八　推量の助動詞　らし・べし・めり・らむ・けむ・まし

雨降る……らし。

……べし。

……めり。

國に母をや殘す……らむ。

いづち行き……けむ。

御代とこしへにめでたから…まし。

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らし		らしく	らし	らしき		
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
めり			めり	める	めれ	
らむ			らむ	らむ	らめ	
けむ			けむ	けむ	けめ	
まし			まし	まし	ましか	

べしは、推量の意をあらはす外に、可能・命令・義務・意志等の意をあらはすことがある。

汝速に行く：べし。（命令）

國民は國法に從ふ：べき：なり。（義務）

我も見物す：べし。（意志）

けむは、過去の推量である。

ちむ・けむは文章中ではちん・けんと書くことが多い。

らしは古くはらし（終止）らし（連體）らし（已然）と活用してゐた。

九　咏嘆の助動詞　なり・けり

初雁が音の聲す：なり。

見渡せば花も紅葉もなかり：けり。

悲しきものは我が身なり：けり。

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり			なり	なる	なれ	
けり			けり	ける	けれ	

一〇　指定の助動詞　なり・たり

孔子は聖人：なり。

君：君たり、臣：臣たり。

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

一一　比況の助動詞　如し

風光繪の：如し。

咲く花のにほふが：如し。

語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
如し	如く	如く	如し	如き		

如しは轉じて推量の意に使はれることがある。

彼は未だ知らざるものの：如し。

右のやうに、助動詞には、(一)動詞に似た活用のもの、(二)形容詞に似た活用のもの、(三)獨特の活用のものがある。

練習題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

(1) 千木（チギ）のほとりを飛べる鳩の、さながら雀の如く見ゆるも、社殿の高大なる爲なるべし。

(2) 主上はや院庄に入らせ給ふ。

(3) 此の方面の戰鬪に二子を失ひ給ひつる閣下の心如何にぞや。

(4) 炭素線としては日本の竹最も適當なりしかば、エデソンは專ら之によりて電燈の心（シン）を製出せり。

(5) 「先生の墓所は細道なれば知れ申すまじ、案内し

參らせん。」とて導き行きけり。

(6) 興福寺の塔、猿澤の池に影をうつして南都第一の美觀たり。

(7) さし昇る朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり。

(8) いづかたに志してか日盛のやけたる道を蟻の行くらむ。

(9) 海まきあぐるたつまきも起らば起れ驚かじ。

自修題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

(1) 自國の國旗を尊重すると同時に、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。

(2) ことはたゞ事ならじと、將軍直ちに物見の兵を出してうかゞはしむ。

(3) かゞり火をたかせ、糧食の用意をなさしむ。

(4) 主上は詩の心を御さとりありて、天顏殊にうるはしく笑ませ給ふ。

(5) 平素きはめて御質素にわたらせられし御有樣、一つ〳〵の御品の上にうかゞはれて、無量の感にうたれたり。

(6) なぎさに立ちて昔を偲べば、そのかみ此處にいかめしく向かひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如し。

(7) 明治神宮の南參道に入れば、夜來の雨に清められし玉砂利さくさくと鳴りて、參拜の人々、あたかも言合はせたる如く、足並の自ら揃ふも尊く思はる。

(8) 舊御苑は、明治天皇御親ら森の下道・下草まで何くれと御仰ありて、自然のまゝに造らせ給ひ、昭憲皇太后かぎりなくめでさせ給ひて、しば〳〵行啓あらせられたりとぞ。

受身(可能・崇敬)の助動詞

第八章　文語助動詞の接續

他の品詞と助動詞との接續

一　受身(可能・崇敬)の助動詞

る……四段・ナ變・ラ變の動詞の未然形

- 彼の說大いに世に行はる。
- 子供なほ幼ければ死なれず。
- 父は家に居らる。

らる……右以外の未然形

- 敵に捕へらる。
- 誰にも解せらる。
- 母君も來られたり。

らるがサ變につく時、「罪せらる」「評せらる」「解釋せらる」となるべきを、「罪さる」「評さる」「解釋さる」となる類は差支ない。この場合は一語と見ず、もとの形にかへして動詞と助動詞とに分解して取扱ふ。

可能の助動詞

二　可能の助動詞

る・らるは受身の助動詞と同じである。

べし・べかりは推量の助動詞から轉じて用ひられたものであるから、接續は推量の助動詞のべしと同じである。

使役(崇敬)の助動詞

三　使役(崇敬)の助動詞

す……四段・ナ變・ラ變の動詞の未然形

- 外に待たす。
- 子を死なす。
- わが君にあらせらる。

さす……右以外の未然形

- 苗を植ゑさす。
- 彼に來さす。
- 臨幸せさせ給ふ。

さすがサ變につく時「手習せさす」「周旋せさす」「賣買せさす」となるべきを「手習さす」「周旋さす」「賣買さす」となる類は差支ない。

しむ……全動詞の未然形　塵を捨てしむ。彼處に居らしむ。行幸せしめ給ふ。

「得しむ」といふべきを「得せしむ」といふことは差支ない。

四　崇敬の助動詞

受身・使役の助動詞と同じである。

五　打消の助動詞

ず……全動詞の未然形　雪未だ消えず。全く影を見ざりき。未だ死なじ。

ざり……同前

じ……同前

崇敬の助動詞

打消の助動詞

時の助動詞

未來

完了

ラ變の連體形　さるいはれ有るまじ。

まじ……右以外の終止形　俄に來まじ。

まじはじよりも推量の意強く、その接續は推量の助動詞のらし・べし等と同じである。

六　時の助動詞

(イ)　未來の助動詞

む……全動詞の未然形　明日は雨晴れむ。

(ロ)　完了の助動詞

ぬ……ナ變以外の連用形　朝日は輝きぬ。

（ナ變にはつかない）

つ……全動詞の連用形　向かふの側へ行きかねつ。

たり……同前　傷を受けたり。

過去

り……四段の已然形　書を買へり。
サ變の未然形　發見せり。
りだけは右のやうに特別の接續をなす。

(ハ)　**過去**の助動詞

き……全動詞の連用形　昔、高僧ありき。
但し、きがカ變・サ變につく時は、左のやうになる。

種類＼活用形	未然	連用
カ變	來(コ)しし しか	來(キ)しし しか
サ變	爲(セ)しし しか	爲(シ)き

終止形きはカ變にはつかない。

又、サ行四段にし・しかがつく時、「暮しし時」「過ししかば」となるべきを「暮せし時」「過せしかば」となる類は差支ない。

けり……全動詞の連用形　立去りけり。

七　願望の助動詞

たし……全動詞の連用形　獻上したし。
まほし……全動詞の未然形　我も行かまほし。
まほしは、未來の助動詞むとほしとの合成であるから、その接續はむと同じく全動詞の未然形につく。

八　推量の助動詞

らし……ラ變の連體形　人有るらし。
右以外の終止形　霰降るらし。
かゝる事もあるべし。
やがて發表すべし。
鐵をも斷つべし。
再びあるべからざる事なり。

べし……同前
(べかり)

めり……同前　　かくこそ侍るめれ。雨降るめり。

らむ……同前　　何れの處にてあるらむ。昔の音やこもるらむ。

右の外

けむ……全動詞の連用形　　何にてありけむ。

けむは過去の推量であるから、過去の助動詞と同じく全動詞の連用形につく。

まし……全動詞の末然形　　春の心は長閑けからまし。

ましは意味がむに似てゐるから、未來の助動詞と同じく未然形につく。

九　咏嘆の助動詞

なり……ラ變の連體形　　かくこそ今は有るなれ。

右以外の終止形　　松蟲の聲すなり。

けり……全動詞の連用形　　登れば登る道はありけり。

咏嘆のけりは過去の意から回想する意味に轉じたものであるから、過去の助動詞と同じく全動詞の連用形につく。

一〇　指定の助動詞

なり……全動詞の連體形　　國旗は國家を代表するなり。

形容詞の連體形　　勇無きなり。

體言　　孔子は聖人なり。

たり……體言にだけつく　　不世出の英傑たり。

一一　比況の助動詞

如し……全動詞の連體形　　水の流るゝ(が)如し。

形容詞の連體形　跡無き(が)如し。
用言の下の助詞が　(右二例參照)
體言の下の助詞の・が　落花雪の如し。
彼が如き者を見ず。

助動詞相互の接續

助動詞相互の接續は、大體動詞と助動詞との接續に準じて知ることが出來る。即ち、動詞の未然形につく助動詞は、動詞に似た活用の助動詞の未然形につき、その他、連用形・終止形・連體形等につく場合も同樣である。

宮は既に落ち　させ　られ　たり　けり。
師を擇びて學ば　しめ　らる　べし。

べし・べかり・らむ・らし・めり・まじ・なり(咏嘆)等のやうに、動詞のラ變に限り連體形につき、その他には終止形につくものは、ラ變に似た活用の助動詞にはやはり連體形につき、その他の助動詞には終止形につく。

明日は晴天　なる　べし。
かゝる事もあり　ぬ　べし。
大いに努力せ　ざる　べから　ず。
子供には飲ま　しむ　べから　ず。

なりのやうに、形容詞の連體形につく助動詞は、形容詞に似た活用の助動詞の連體形につき、如しのやうに用言の下の助詞がにつく助動詞は、やはり助動詞の下の助詞がにつく。

かゝる行は、す　まじき　なり。
祖先を尊敬すべきは、親を尊敬す　べき　が　如し。

練習題

一、次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び接續について述べよ。

(1) 主人は氣の毒とや思ひけん、僧をば待たせおき外に出で行きけり。

(2) いかなる人なりけん、たづね聞かまほし。

(3) 春過ぎて夏來るらし。

(4) 行幸餘りに遲かりしかば、人をしてうかゞはしむ。

(5) 生きて一鄕の爲に盡くせる人は、死して一鄕の爲に惜しまる。

(6) 來し方行く末思ひやられて眠られざりき。

(7) 器にはしたがひながらいはほをもとほすは水の力なりけり。

(8) 橘中佐が特に軍神とあがめらるゝもうべなりといふべし。

二、次の文の誤を正し、其の理由をいへ。

(1) 此の處に塵を捨つるべからず。

(2) 父より通信を受けり。

(3) 遠き路をも厭はずしてかゝる田舍に來き。

(4) 亞歐連絡飛行の成功もし事日本の誇なり。

(5) 思ふに彼は今日來るまじ。

(6) 不都合の振舞有らきすなかれ。

自修題

一、次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び接續について

述べよ。

(1) 何時までもかくておはすべきにあらねば、何處へなりとも行き給へ。
(2) 行交ふ村人の取りつくろはぬ言の葉手に取る如く聞かる。
(3) 早く一人前の商人となりて親に安心させたし。
(4) 我が夢はいづくの山にやあらん驅けめぐりつ。
(5) 同じ物にても意の如くに得らるれば價なく、得がたければ價あるなり。
(6) あはれ今年の秋も往ぬめり。
(7) 一木一草に至るまで歴史あり古歌あり、人をして低回去る能はざらしむ。

二、次の文の誤を正し、理由をいへ。

(1) 雷にうたれて死にぬ。
(2) 行はば行はるべし。
(3) かゝる行はするまじきことなり。
(4) 彼の財産も盡くるらし。
(5) 彼方の山の朧なるは霞の之を隔つなり。
(6) 奮鬪し甲斐ありて見事成功したりき。
(7) 首尾よくその任を終へり。
(8) 言々句々肺肝より出で、溢る如き熱誠にみちたり。
(9) 飛ぶ鳥を射ずしむるに射ずといふことなし。
(10) その任は我に就かし給へ。

三、助動詞を動詞の未然形・連用形・終止形・連體形・已然形につくものに分類して表をつくれ。

第九章　文語助詞の種類

助詞は次のやうに、種々の語に添うて種々の意味をあらはすもので、文語も口語の場合と同じやうに、三類に分けられる。その用法は兩者同じものもあり、又ちがふものもある。

一　第一類

主として體言又は體言に準ずる語に附いて、その語に資格を與へるもの。

が　汝が知る處にあらず。　君が代。
　　梅が香あたりにたゞよふ。

の　秋風の吹く。　櫻の花咲けり。
　　そは彼の本なり。　花の都。

つ　天つ神。　沖つ風。

を　書を讀む。　山を下る。

に　机の上に載す。　人に與ふ。
　　月に叢雲花に風。　東京に行く。
　　彼に劣らず。

へ　彼方へ逃ぐ。　京都へ行く。

と　友人と散歩す。　ペンとインクとあり。
　　彈丸は雨と降る。　石井といふものあり。
　　水湯となる。

より　學校より歸る。　父母の恩は山より高し。

まで　大阪まで行く。

にて　筆にて書く。　外國にて生まる。

二　第二類

主として用言及び助動詞に附いて下の意味との

續きに關するもの。

ば　雪降らば行くまじ。　價安くば買はん。
雪降れば行かず。　價高ければ買はず。

とも　繪に書くとも及ばじ。　死すとも背かじ。

ど　春來れど花咲かず。

ども　行けども盡きず。

も　行くも遲からん。　急ぎたるも間に合はざりき。

に　努力せしにかひなかりき。

を　かくまでとは思はざりしをさても險しき山かな。

が　訪づれしが不在なりき。

て　行きて見ん。

で　友とも知らで行過ぎぬ。

第三類

つゝ　涙を流しつゝ語る。

ながら　歩みながら語る。

三　第三類　種々の語について種々の意味を添へるもの。

は　日本は神國なり。　彼よりは高し。
われは行かざれど、彼は行かん。

ば　湯をば飲めど、水をば飲まず。

も　彼も行くまじ。　野も山も花盛なり。
父とも母とも思ふ。

ぞ　月ぞすめる。　我も日本人なるぞ。

なむ　かくなむ言へる。　家をなむ思ふ。

や　果して其の人なりや。　花や散りし。
さることあらんや。

か　山に登りしか。　いづくにかある。
　誰か知らざらん。

こそ　よくこそ來給ひつれ。　時こそ來れ。

し　なきにしもあらず。　折しもあれ。

だに　禽獸にだにしかず。　僅か一歩だに歩まず。

すら　禽獸すら恩を知る、況んや人に於てをや。

さへ　風はげしきに雨さへ降る。

のみ　學問にのみふける。

ばかり　語るは今日ばかりなり。
　三年ばかり住みたり。

など　雨など降りていとうるさし。

な　急ぎて過すな。

な・そ　春な忘れそ。

ばや　いざ今暫し宿らばや。

なむ　幼子よ世の汚れをば知らであらなむ。

がな　行くよしもがな。

かな　あゝ悲しいかな。

かも　三笠の山に出でし月かも。

かし　疾く言へかし。

よ　雨よ降れ。　鶯も來て鳴けよ。

や　あゝ面白の景色や。　うらめしや。
　古池や蛙飛込む水の音。

も　鶯鳴くも。

な　いたく老いにけりな。

第一〇章　注意すべき文語助詞の用法

一　に・へ

に・へ

文語ではには場所を、へは方向を示す場合に使はれる。

東京に行く。

彼方へ行く。

口語ではあまり區別がない。

二　ば

ば

(イ)　假定の意をあらはす場合　活用語の未然形に添ふ。

明日雨降らば、遠足は中止すべし。

水清くば、大魚棲まじ。

父上も贊成ならば、汝も行くべし。

(ロ)　既定の意をあらはす場合　活用語の已然形に添ふ。

今日雨降れば遠足は中止す。

水清ければ、大魚棲まず。

父上も贊成なれば、汝も行くべし。

口語では、假定形にばを添へて假定の意をあらはし、既定の意をあらはすには、終止形にので・から等を添へる。

三　とも

とも

動詞・形容動詞及び動詞に似た活用の助動詞の終止形、形容詞及び形容詞に似た活用の助動詞の連用形に添うて假定の意をあらはす。

人笑ふとも、意に介せじ。

勇壯なりとも如何せん。

悲しくとも、泣くな。

ど・ども

如何に非難せらるとも、頓着せじ。

但し、連體形に添ふ習慣あるものは、それに從つても差支ない。

數百年を經るとも……

如何に批評せらるゝとも……

口語では、多くはても(でも)を使ひ、活用語の連用形に添ふ。

四　ど・ども

活用語の已然形に添うて、既定の意をあらはす。

人笑へども(ど)、意に介せず。

悲しけれども(ど)、泣かず。

數回讀みたれども(ど)、理解せられず。

假定又は既定の意をあらはす場合、誤解を生じない限り、とも・どもの代りにもを使つても差支ない。

な・そ

と

何等の事由あるも(ありとも)、議場に入ることを許さず。

期限は今日に迫りたるも(たれども)、準備は未だ成らず。

口語ではけれども を使ひ、終止形に添ふ。

五　な・そ

なは上につき、そが、カ變・サ變の動詞の未然形、その他の動詞・助動詞の連用形に添うて、禁止の意をあらはす。

な來そ。　な爲そ。　な死にそ。　な行かせそ。

六　と

(イ)　並列の意をあらはす場合　體言に添ふ外、活用語には、その連體形に添ふ。

これ德あると德なきとによるなり。

並列のとは上の語句の一々に皆添へるべきであるが、紛れぬ場合

に限り、最後のとを省いても差支ない。

宗教と道徳の關係を論ず。

省いてならぬ場合

甲と乙の兄が來た。（甲と乙との兄が來た。／甲と乙の兄とが來た。）

（ロ）上文を指示する場合　活用語の終止形に添ふ。

朝日昇ると思ふ間もなく、……

運命も盡きぬと見えたり。

但し、連體形に添ふ習慣あるものは、それに從つても差支ない。

月出づると見えて、……

嘲弄せらるゝと思ひて、……

七　だに・すら・さへ

だに・すら・さへ

禽獸にだに若かず。

生死すら明らかならず。

道險しく、雨さへ降る。

右の例のやうに、だに・すらは、最も意味の輕いものを表面にあらはして、意味の重いものを言外に含ませ、さへは既にある上に更に加る意をあらはす。

口語では右の區別はなく、さへが一般に使はれる。

ばや・なむ

ばや・なむ

共に動詞・助動詞の未然形に添ひ、願望の意をあらはす。

我も行かばや。

花も咲かなむ。

母に知らせばや。

ばやは自分の希望をあらはし、なむは他に對する注文をあらはす。即ち右の例で、「行かばや」は「行きたいものだ」といふ意、「咲かなむ」は「咲いてほしいものだ」といふ意となる。

又「花も咲きなむ」のやうに連用形に添ふなむは、完了の助動詞ぬの未然形に、未來の助動詞むの添うたもので、助詞のなむとは違ふ。

九　や・か

（イ）疑の意をあらはす場合　活用語に添ふ時、やは終止形に、かは連體形に添ふべきである。

果してその人なりや。

果してその人なるか。

但し、今はやも連體形に添ふことが多いが、それも差支ない。

父に似たるや、母に似たるや。

（ロ）上に疑問の語の來る場合　下にかを使ふべきである。

五と三との和は幾何なるか。

これを如何にすべきか。

但し、今はかやうな場合にもやを使つても差支ない。

幾何なるや。　如何にすべきや。

（ハ）反語の意をあらはす場合

豈我のみならんや。

誰かは感激せざらん。

一〇　係結の法則

（イ）谷川の水ぞ清き。

彼なむ行ける。

花や散れる。
誰かある。
(ロ)　水こそ清けれ。
我こそ行かめ。

右の例のやうに文語では、ぞ・なむ・や・かが文の途中に來る時は、それに應ずる結は連體形となり、こそが文の途中に來る時は、それに應ずる結は已然形となる。この法則を係結の法則といふ。

但し、その文が接續の助詞によつて、下に續けられる場合は、係結の法則は消えて、その助詞の接續の法則に從ふ。

なさけある人とぞ聞ゆれば、……
時鳥一聲とこそ思ひしが、……

練習題

一、次の文中から助詞を選び出し、特に傍線ある助詞の意味をいへ。

(1) 打寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。
(2) 淺緑すみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな。
(3) 一人も殘さず討取つて、此の度の賞に預らばや。
(4) 波風やまねば船出さず。
(5) 雨は降りたるも風は吹かざりき。
(6) 東風吹かば香おこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ。
(7) 限ある世に限なきことを思ふべきかは。
(8) 波風の靜かなる日も船人はかぢに心を許さざら

なむ。

(9) 主人は聲を限りに呼べど、はるかに行過ぎたる僧は、聞えぬにや、ふりかへらず。

二、次の文の係結について述べよ。

(1) 君をおきて誰をか賴むべき。

(2) 煙たなびくとまやこそわがなつかしき住家なれ。

(3) 村の社の掃除や終へし、はうき手に〳〵此方をさして、語り來る若き人々。

(4) 我が身を捨てて報いんと、起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。

自修題

一、次の文中から助詞を選び出し、全文を口語に譯せ。

(1) 洗ひ清めんとする人の少きこそ心得ね。

(2) その人かたちより心なんまさりたる。

(3) 彼だにあらば救はれしを、口惜しきことなりき。

(4) 此の人なからましかば、日の本の國も如何になりなましとこそ覺えしか。

(5) 山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心われあらめやも。

(6) はや馬にておはしまさなむ。

二、次の文中の誤を正し、其の理由をいへ。

(1) をかしとも笑ふべからず。

(2) 富士の山こそ昔より名高し。

(3) 友を訪ねて會はれざるぞ遺憾なれ。

(4) さる事をばなしそ。

(5) 明日雨降れば運動會を延期すべし。

第一一章　文語の接頭語・接尾語

一　接頭語

単獨には使はれないで、他の語の上について熟語となる語を接頭語といふ。

うひ陣　お庭　す足　ひが目　ま心　を田
た走る　ほの見ゆ　いや増す　さ迷ふ　か弱し
け高し　なまやさし　もの寂し　た易し

又

うち出づ　さし出す　ひき受く

右のうち・さし・ひき等は本來動詞であるが、その本の意を失つて接頭語となつたものである。

二　接尾語

單獨には使はれないで、他の語の下について熟語となる語を接尾語といふ。

子ども　彼ら　君たち　奴ばら　君がた
長さ　嬉しさ　厚み　重げ
春めく　黄ばむ　嬉しがる　上品ぶる
露けし　男らし　馬鹿らし　隔てがまし
夜すがら

練習題

次の文中から接頭語・接尾語を選び出せ。

(1)　西北に當れる高地に兵を引きまとめたり。

(2) 東國へ下る路すがら箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見たり。
(3) 木の葉黄ばむ頃となれば、淋しさいはん方なし。
(4) 將軍秀忠刀取りて障子を引きあくれば、御臺所燈火取りて出でらる。
(5) 夕やみほの暗くせまりて、あたりいとものの淋し。
(6) 別れを告げて立去れり。
(7) 雲も水も金色に輝き、美しさいふばかりなし。
(8) 日本人は日本人らしく振舞はざるべからず。
(9) 議論がましきことな宣ひそ。
(10) 何時の間にかいとど春めきて、木々の梢若芽萠出でたり。

轉成の名詞

第一二章　品詞の轉成

品詞は他の品詞に轉じて使はれることがある。

一　轉成の名詞

一、動詞から轉じたもの

(イ) 連用形から　光　戰　氷　霞　帶　眺　笑
あゆみ　登り　降(クダ)り　見積　手傳

(ロ) 終止形から　陽炎(カゲロフ)　角力(スマフ)　茂(シゲル)(人名)

二、形容詞から轉じたもの

(イ) 連用形から　近くの家　遠くの村　早くより
遲くまで

(ロ) 終止形から　あかし(燈火)　芥子(カラシ)　すし(鮨)　正(タダシ)(人名)

三、感動詞から轉じたもの

あはれ

四、形容詞の語幹に接尾語さ・み・けの添うたもの

深さ　樂しさ　重み　寒け

二　轉成の代名詞

名詞から轉じたもの

君　僕　わらは　殿下　閣下　お前(口)

三　轉成の動詞

一、名詞から轉じたもの　れうる(料理)　ひとりごつ(獨言)

二、名詞を語幹とするもの　つなぐ(綱)　またぐ(股)　影る

三、形容詞を語幹とするもの　惜しむ　悲しむ　樂しむ

四　轉成の形容詞

轉成の代名詞

轉成の動詞

轉成の形容詞

動詞の未然形を語幹とするもの

騒がし　勇まし　誇らし　狂はし　やまし(疾)

五　轉成の助動詞

動詞から轉じたもの

たまふ　おはします　ます　奉る　候(文)

なさる　遊ばす　いたす　まうす(口)

六　轉成の副詞

一、名詞から轉じたもの

昔、男ありけり。　つゆ知らず。

ゆめ覺えず。

二、動詞の連用形から轉じたもの

あまり早し。　たとへ死すとも。

轉成の助動詞

轉成の副詞

はじめ困れり。

副詞には右の外、みだりに・強ひて・殘らず・例へば等、他の品詞から合成されたるものが多い。

又形容詞の連用形はすべて副詞の働をする。

空青く澄む。　子供ら樂しく遊ぶ。

形容詞の語幹から轉じた長々・久々・うす〳〵など口語で使はれる場合が多い。

轉成の接續詞

七　轉成の接續詞

一、名詞から轉じたもの

無事勉強致し居り候間御安心下され度候。

先方に交渉致し候處幸快諾を得申し候。

轉成の感動詞

二、動詞から轉じたもの　文法及び作文。

三、副詞から轉じたもの　山また山　雲か山かはた越か。

口語には助詞から轉じたものにで・が・と・けれども などがある。

八　轉成の感動詞

副詞から轉じたもの

いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。

なほ口語には次のやうなものがある。

一、代名詞から轉じたもの

これ、そんな事をしてはいかん。　それ、又失敗した。

あれ、雪が降る。　どれ、行かうか。

二、副詞から轉じたもの

さて困つた。　いやはや、恐れ入りました。

練習題

次の文中の轉成の品詞を選び出し、それを說明せよ。

(1) 昨日その家へ行つてみた。が、誰もゐないといふわけさ。（口語）
(2) 月の光が軒端を洩れて、疊の上を明かるく照らしてゐる。（口語）
(3) 月夜の靜かさに醉ひ心地になる。（口語）
(4) さて〳〵、目あきは不自由だ。（口語）
(5) 向かふの山が霞に包まれて朧に見える。（口語）
(6) 彼の秀でたる技は早くより認められたり。
(7) 君の惠は山より高く、父母の恩は海より深し。
(8) 兄より敎を受け、よく其の敎を守れり。
(9) ゆめ忘れ給ふこと勿れ。

自修題

一、次の文中傍線ある語の異同を述べよ。

(1) (イ) 何事もなかりしか。
(ロ) かくこそ出で入り給ひしか。
(ハ) 召されしかば參りぬ。
(2) (イ) 波靜かなり。
(ロ) 風となり雨となりぬ。
(ハ) かの山は富士山なり。
(ニ) 鳴く鶯の聲すなり。
(3) (イ) 兒等はいづくにか行きし、はや歸らなむ。
(ロ) 夜は更けぬ、はや歸りなむ。
(ハ) 三とせすぎて、浦島は故鄕に歸りけるとなむ。
(4) (イ) 月に雲なたなびきそ。

(ロ) 冬來りなば如何せまし
(ハ) 水を賜へな。

(5)
(イ) 威風堂々たり。
(ロ) 花散りたり。
(ハ) 孔子は聖人たり。

(6)
(イ) あなうれしのことや。
(ロ) かしこに遊べることありや。
(ハ) 古池や蛙飛込む水の音。

(7)
(イ) さることもあらん。
(ロ) 雪も消ゆらん。
(ハ) 玉の光は添はざらん。

(8)
(イ) 淋しき冬よ行きねかし。
(ロ) 早く往ね。

(ハ) 姿こそ見えね、聲はまがふことなし。

(9)
(イ) 紅葉すればや照りまさるらん。
(ロ) 人に見せばや。

(10)
(イ) 昔紀貫之といふ歌人ありけり。
(ロ) 吉野の山の櫻咲けり。

(11)
(イ) 我人に笑はる。
(ロ) 笑へる顏の愛らしさ。
(ハ) 亡き母のことのみ思はる。

(12)
(ニ) 父は畫を好まる。
(イ) 東京より大阪まで。
(ロ) 義は泰山より重し。
(ハ) 酒は米より製す。

二、次の文を品詞に分け、活用語は特に其の活用をいへ。

(1) 世界の海戰史上、最も赫々たる名聲を博するものは、英國の水師提督ネルソンなり。

(2) 彼我の擊出す砲彈、恰も急雨の亂下するが如く、面を向くべくもあらざる中に、大將は從容として立てり。そゞろに膽甕の如き相模太郎の風姿を思ひ浮かべしむ。

(3) 大阪より雨を冒して奈良に遊ぶ。汽車に乘りては風さへ加りて、窓をあくることもならねば、法隆寺など呼ぶ聲を空しく聞くのみなりき。

(4) 天に一片の雲なき夕べ、逗子の海濱に立つて、伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとも思はれず。

第三篇　文章篇

第一章　文の成分

一　主語・述語

一　花が　散る。（口語）

二　あなたは　どなたですか。（口語）

三　月　清し。

四　波　靜かなり。

五　彼も　行けり。

右の文に於て、花が・あなたは・月・波・彼もは其の文の主體をなす語であるから、これを**主語**といひ、散る・どなたですか・清し・靜かなり・

主語
述語

行けりは主語についてその動作・狀態・性質等を述べる語であるから、これを**述語**といふ。

主語は普通體言から成り、文語では單獨にあらはれる場合と助詞は・も・が等を伴なふ場合とあるが、口語では必ず助詞を伴なふ。

主語は又左の例のやうに體言に準ずる語から成ることもある。

一　赤いのが　美しい。（口語）

二　過ぎたるは、及ばざるが如し。

三　勤勉なるは、いとよし。

述語は普通用言又は用言に助動詞・助詞の添うたものから成る。但し、又左の例のやうに、體言又は體言に準ずる語に助動詞又は助詞の添うたものから成ることもある。

一　東京は　日本の首府です。（口語）

二　歳月　流るゝが如し。

三　汝　何者ぞ。

主語・述語は文の主成分であつて、普通これが備らねば完全な文とはいへない。

二　補語

一　父が　花を　見てをられる。（口語）

二　水が　湯に　なる。（口語）

三　あの方は　東京から　行かれました。（口語）

四　言はぬは　言ふに　まさる。

五　彼は　寒きを　いとはず。

六　中江藤樹は　俗稱を　與右衛門と　いふ。

右の例に於て傍線を施した語は、各、其の述語の目的をあらはし、

又は述語の意味を助けて其の働を完全にする。かやうな語を**補語**といふ。

補語は體言又は體言に準ずる語から成り、必ず助詞を・に・と等を伴なふ。

補語は、述語の性質によつて必ず無ければならぬ場合と無くてよい場合とある。

三　修飾語

一　美しい花が　ちら〳〵と散る。（口語）

二　富士の山　皚々たる白雪を　戴く。

三　鏡の如き月　鬱蒼たる森に　明かくかゝれり。

右の例に於て傍線を施した語は、各、主語・述語又は補語を修飾してゐる語である。かやうな語を**修飾語**といふ。

修飾語

形容詞的修飾語

副詞的修飾語

修飾語の中、體言を修飾するものを**形容詞的修飾語**といひ、用言を修飾するものを**副詞的修飾語**といふ。

形容詞的修飾語は、形容詞又は形容詞に準ずるものから成る。

激しい雷が終日鳴りひゞいた。（口語）

靜かな海を走る。（口語）

吹く風いと涼し。

行方も知らぬ旅に出立つ。

庭の櫻咲けり。

副詞的修飾語は副詞又は副詞に準ずるものから成る。

戰はます〳〵烈しい。（口語）

清く澄んだ水を湛へてゐる。（口語）

一羽の鳶悠然と飛ぶ。

人々泣く〳〵立去れり。

主語・補語の修飾語は、直接其の上につくが、述語の修飾語の中の副詞的修飾語は、他語を隔てて修飾する場合がある。

一　突然　濃霧が一行を包んだ。（口語）

二　早くも　日の丸の旗、檣頭に飜りぬ。

三　彼は　深更まで　文を書續けたり。

右のやうな場合は、修飾語は其の下全部を修飾してゐるものである。

四　獨立語

一　太郎や、お前どうしたの。（口語）

二　あはれ、今年も無爲に終りぬ。

三　雨はげしく、且、風強し。

獨立語

右の例に於て傍線を施した語は、主語・述語・補語又は修飾語の何れにも屬せぬものである。かやうな語を**獨立語**といふ。

練習題

次の文の主語・述語・補語・修飾語・獨立語を示し、修飾語は其の種類と其の修飾する語とをいへ。

(1)　これ北八、お前これをかついでくれ。（口語）

(2)　水兵は、蜘蛛の子を散らすやうに、八方に散つた。（口語）

(3)　われは、友をして事情を彼に告げしめたり。

(4)　臣民たる者、片時も忠君の心を失ふべからず。

(5)　熾なる火は、濡れたる物を忽ち乾かす。

(6)　國旗は實に國家を代表する標識なり。

(7)　優美溫雅なる山川は、常に我が國民に自然愛好の性情を育成せり。

正常

倒置

第二章　文の成分の位置及び省略

一　正常の場合

一　清らかな水が　さら〳〵と流れる。（口語）

二　熱心なる聽衆は　廣き講堂に　潮の如く押寄せたり。

右の例で明らかなやうに、文の成分の正常な位置は次の通りである。

一（修飾語）主語……（修飾語）述語。

二（修飾語）主語……（修飾語）補語……（修飾語）述語。

但し、述語の修飾語中の副詞的修飾語が、時に補語又は主語の上に來ることは、前章で說いた通りである。

二　倒置の場合

省略

一　何を　あなたは見てゐるのですか。（口語）

二　荷物を持ちませう、　私が。（口語）

三　善いかな、　言や。

四　かゝる善言を　誰か信ぜざらん。

右は語調を整へ、又は語勢を強める爲に、文の成分の位置を變へたものである。

三　省略の場合

（イ）主語の省略

一（私は）昨夜は十一時に寢ました。（口語）

二（人々）此の處に塵芥棄つべからず。

（ロ）述語の省略

一　あなたのお宅は。（どちらですか。）（口語）

二　千里の道も一歩より。（始まる）

（ハ）**補語**の省略

一　それは御不用ですか。では私に（それを）下さい。（口語）

二　神よ、願はくは（我に）幸あらしめたまへ。

三　祕訣あり。（それを）（汝に）授けん。

（ニ）**其の他一部分**の省略

一　お前もおいで（なさい）。（口語）

二　私はそんな事（を）は知りません。（口語）

三　樂は苦の種（なり）、苦は樂の種（なり）。

右の例のやうに、文は冗長を避け、又は意味を強める爲に、其の成分を省略することがある。

練習題

次の文中省略されたものは補ひ、倒置されたものは正常の位置におけ。

(1)　おゝ降つたは〳〵。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。（口語）

(2)　「どちらへいらつしやいますか。」「京城へ參ります。あなたは。」（口語）

(3)　昨日はどうしたのだ、君は。待つたよ、僕。（口語）

(4)　よき日は明けぬ、さわやかに。朝日は出でぬ、花やかに。

(5)　言ふをやめよ、他郷苦辛多しと。

(6)　なぎさの松に吹く風を、いみじき樂と我は聞く。

(7)　料らざりき、今日君の葬に會はんとは。

節

第三章　節

一　雪の降る景色は美しい。（口語）

二　國旗の天空に飜つてゐる姿は勇ましい。（口語）

三　鳥が花の咲いてゐる枝で鳴いてゐる。（口語）

四　神戸港は、海深し。

五　花笑ひ、鳥歌ふ。

六　風靜かにして、波穩やかなり。

七　我は文學を好み、弟は理學を好む。

右の例のやうに、或文が全文の中に含まれてゐる場合、其の含まれてゐる文を**節**といふ。

右の一・二・三・四の例のやうに、節が全文中に從屬して其の成分をなす場合、これを**從屬節**といふ。

又右の五・六・七の例のやうに、節が各、從屬關係をなすことなく、幾つかの節が對立的に相寄つて一文をなす時、それ等の節を**對立節**といふ。

從屬節
對立節
體言節

從屬節の種類。

一　體言節

一　價の高いのが　貴いわけでない。（口語）

二　鯉幟の天空にひるがへるのは　勇ましい。（口語）

三　我々は　時の移るを　知らざりき。

四　島は　雲の海上に浮かべるに　似たり。

右の例のやうに、體言に準じて文の主語・補語の働をする節を體言節といふ。

用言節

二　用言節

一　鶴は　首が長い。（口語）

二　蟻は　性勤勉なり。

右の例のやうに、用言に準じて文の述語の働をする節を用言節といふ。

形容詞節

三　形容詞節

一　陽炎の燃える春の日が來ました。（口語）

二　月明かき夜、舟を海上に浮かぶ。

三　生徒は　先生の職を退かるゝことを　悲しめり。

右の例のやうに、形容詞に準じて形容詞的修飾語となる節を形容詞節といふ。

副詞節

四　副詞節

一　子供らが　節面白く　歌つてゐる。（口語）

二　櫻の花　色美しく　咲けり。

三　波荒くとも、船は出帆せん。

右の例のやうに、副詞に準じて副詞的修飾語となる節を副詞節といふ。

練習題

次の文中から節を選び出し、其の節の種類をいへ。

(1)　わたくしは、君が東京に行かうとは思はなかつた。（口語）

(2)　父はいつも日の出ないうちに、起きます。（口語）

(3)　雲のたなびいてゐるやうに見えるのは、櫻の花が爛漫と咲いてゐるのだ。（口語）

(4) 我が國は風光が極めて明媚である。（口語）
(5) 國語こそは國民の魂の宿る所である。（口語）
(6) めい〳〵が私の教を行ふ所に、私は永遠に生きてをる。（口語）
(7) 寒からぬ雪、雲なき空より降る。
(8) 水清ければ、底の眞砂も數へつべし。
(9) 身は鐵石にあらざれば、砲丸に倒るゝ兵士の數知れず。
(10) 旅館の燈かすかにして鷄鳴曉を催す。
(11) 秋の風は泣き、冬の風は怒る。
(12) 草茫々として、人跡全く絶えたり。

自修題

次の文中から節を選び出し、其の節の種類をいへ。

(1) 私たちは、そこで夜があけるのを待ちました。（口語）
(2) 空の青く見えるのは、空氣の中を日光が透る爲である。（口語）
(3) 花を見るのは春で、紅葉を眺めるのは秋だ。（口語）
(4) 出雲の大社は規模の大なるを以て世に知らる。
(5) 何れも重要ならざるはなけれど、中にも其の用途の廣きは杉及び檜なり。
(6) 誰か德高き人を敬はざらん。
(7) 規模の雄大にして建築の宏壯なる、實に天下に冠たり。
(8) 箱根路をわがこえくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ。
(9) 味よき魚は、荒海に住むとぞ。
(10) 月明らかに、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。

主部　述部

第四章　主部・述部・補部・敘述部

一　主部

一　雲霞の如き大軍が　押寄せた。（口語）

二　飛行機の青空に群飛ぶは　壯快なり。

三　雨の降る夜は　淋し。

右の例のやうに、主語に修飾語が添ふ場合、又は主語が節から成り又は節を含む場合、「雲霞の如き大軍が」「飛行機の青空に群飛ぶは」「雨の降る夜は」といふ全體を主部といふ。

二　述部

一　蓮の花が　涼しさうに咲出た。（口語）

二　我が父は　元氣頗る宜し。

三　大阪は　交通の便利なる土地なり。

右の例のやうに、述語に修飾語が添ふ場合、述語が節から成り又は節を含む場合、「涼しさうに咲出た」「元氣頗る宜し」「交通の便利なる土地なり」といふ全體を述部といふ。

三　補部

一　健全なる精神は　健全なる身體に　宿る。（口語）

二　母親が　子供の泣くのを　あやしてゐる。（口語）

三　磯邊の船、潮のさし來る時を　待てり。

右の例のやうに、補語に修飾語が添ふ場合、又は補語が節から成り又は節を含む場合、「健全なる身體に」「子供の泣くのを」「潮のさし來る時を」といふ全體を補部といふ。

四　敘述部

補部　敘述部

主語(又は主部)に對して、補語(又は補部)と述語(又は述部)とを合はせて敍述部といふ。

練習題

次の文の主部・述部・補部・敍述部を示せ。

(1) 涼しい風がそよ〳〵と吹いて來る。(口語)

(2) 大小さま〴〵の馬が、廣い野原を、あちらこちらとかけまはつてゐる。(口語)

(3) 黃金のやうな月が、東の山の端に、そのやはらかい姿を現した。(口語)

(4) 新聞はその災害の意外に甚だしかりしを報ぜり。

(5) 彼所の森こそ神の鎭ります所なれ。

(6) わが聯合艦隊は威風堂々と入港せり。

(7) 荒廢せる城址は、そゞろに詩人の心を動かす。

自修題

次の文の主部・述部・補部・敍述部を示せ。

(1) 山の裾があちらこちら白いのは、蕎麥の花であらう。(口語)

(2) 日本の櫻は、其の色が極めてあつさりしてゐる。(口語)

(3) 雪をいたゞいた富士が、淡くほのかに聳えてゐる。(口語)

(4) 身をきるやうな寒い風が、破れた笠をひゆう〳〵と吹く。(口語)

(5) 伊豆の山々は今や燦然たる朝日の光を浴びたり。

(6) 花は風吹かずとも散りぬべし。

(7) 華やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなりぬ。

(8) 日本國民として生まれたる我等は、一日片時といへども忠君愛國の念を忘るべからず。

第五章　文の種類

一　單文

一　花が　咲く。（口語）

二　美しき鳥　うれしげに啼く。

三　警官　賊を捕ふ。

右の例のやうに、主語と述語との關係が一通りであつて、一文の中に節を含むことのない文を單文といふ。

一　正成と義貞とは　建武中興の功臣である。（口語）

二　私は　鉛筆とペンとノートとを　買つた。（口語）

三　私は　行はうと思つたことを行ひ盡くし　語らうと思つたことを語り盡くした。（口語）

四　植物は　發育し、生長し、繁殖し、枯死す。

五　風俗　質朴にして、剛健なり。

右の例のやうに主語・述語・補語が幾つも重なつたり、又は補語に述語の添うたものが幾つも重なることがあるが、主語と述語との關係は同種類のものであつて、別種のものではない。これもやはり單文である。

二　複文

一　月の明かるい夜は　散歩によい。（口語）

二　花の散るのは　きれいです。（口語）

三　日本海は　波が荒い。（口語）

四　歳月は　水の流るゝが如く　過去る。

五　鮎は　瀬の早きを　喜ぶ。

六　天氣清朗なれども　波高し。

右の例のやうに、從屬節を含む文を複文といふ。

右の例の三のやうに、節が述部となつてゐる場合、「日本海は」といふ全文の主語は、特に**文主**といふ。

文主

三　重文

重文

一　松は青く、砂は白い。（口語）

二　兄は庭を掃き、弟は水を汲む。（口語）

三　風雨烈しく、道は暗く、提灯も消えたり。

右の例のやうに、對立節の相寄つて成る文を重文といふ。

練習題

次の文の種類をいひ、其の構造を說明せよ。

(1) いつか夜も全く明けはなれて、月も星も光を朝日に讓つた。（口語）

(2) 風の音も、水の音も、車馬の音も、人の足音も、全く消えはてた。（口語）

(3) 村の人が野菜や炭や薪を馬や車に積んでゐる。（口語）

(4) 天氣のよい日は暑いし、雨の降る日は鬱陶しい。（口語）

(5) 月影のさゞなみにくだけ、漁火の波間に出沒する夜景も、亦一段の趣あり。

(6) 東寺の塔は吾を迎へて立ち、鴨川の水は吾を待ちて歌ふ。

(7) 蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。

(8) 各國の國旗は、或は其の建國の歷史を暗示し、或は其の國民の理想・信仰を表すものなり。

自修題

一、次の文の種類をいひ、其の構造を說明せよ。

(1) 爛漫と、咲亂れた櫻花の、山を埋め、谷に滿ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は、日本特有の美である。（口語）

(2) 銀杏が一晩の中に葉を落したので、庭は黃金を敷いた樣に明かるい。（口語）

(3) あるゝかと見ればなぎゆく海原の浪こそ人の世に似たりけれ。

(4) 觀光の外人は、我が風光の明媚なるを見て、世界の公園の稱の空しからざるを知れり。

二、次の和歌の主語・述語を示せ。なほ、節を含めるものは、其の節の主語を指示せよ。

(1) むつまじく枝をかはして咲く梅もさかりあらそふ色は見えけり。

(2) すく〳〵と生ひ立つ麥に腹ずりて燕飛びくる春の山畑。

(3) 古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと。

(4) 散る花をのせてかへりぬ渡船むかひの岸に人はおろして。

自修題補遺

一、次の問に答へよ。

(1) 文法上で文といふものはどんなものか、例をあげていへ。

(2) 品詞の中、活用するものとせぬものとを區別していへ。

(3) 體言・用言とは何か。

(4) 動詞の活用と形容詞の活用との差異をいへ。

(5) カ變・サ變の動詞の文語と口語との差異をいへ。

(6) 六つの活用形がすべてちがつてゐる動詞は何々か。

(7) 文語の形容動詞と口語の形容動詞とを比較してかけ。

(8) 音便の種類を例をあげていへ。

(9) 助動詞べし・らる・むの各の示すすべての意味を例をあげて示せ。

(10) 助動詞らるの異なりたる三つの意味を例をあげて示せ。

(11) 打消の助動詞をすべて擧げ、其の意味の異同をいへ。

(12) 崇敬の意を示す助動詞及び接頭語をいへ。

(13) 文中で、指定の助動詞のなりと咏嘆の助動詞のなりと形容動詞の語尾なりとは、何によつて區別するか。

(14) 文中で、助詞のなんと助動詞のなとんと連續したものとは、何によつて區別するか。

(15) 係結の法則とはどんなことか、例をあげていへ。

(16) 助詞ばの用法についていへ。

(17) 複數を示す接尾語を知つてゐるだけいへ。

二、次の文中傍線ある語の品詞名をいへ。

(1) この書物は一度讀んだ事があるやうだが、さうでないかも知れない。（口語）

(2) (イ) 來し方行く末の事おもひやらる。

(ロ) 人をして低回去る能はざらしむ。

(ハ) 苗木を庭に植ゑさす。

(3) 猛き人も遂には亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ。

(4) うるはしき日は夢の如く消えさりて、我が思のみぞ獨り老いにける。

(5) 君の行ふところ或は君をあやまらむ。

(6) 鶯は谷の古巢を出でぬともわが行方をば忘れざらなむ。

(7) 天然の美は更に人工の美よりすぐれたり。

三、次の文中の活用語を指摘し、其の種類及び活用形の名をいへ。

(1) 良からうとは思はなかつたのです。（口語）
(2) 幾匹とも知れぬ鳥が裏の森で騒ぎたててゐる。（口語）
(3) 彼は忙しいのではない。（口語）
(4) 皆さんはあの涙ぐましい働を御存じでせう。（口語）
(5) 主人の情心にしみ、別れがたき思ありしが、何時まで留るべき身にもあらねば、旅僧は心強くも立去りけり。
(6) 志を遂げんと欲せば、寸刻を惜しみて勉勵すべし。
(7) 燒かずとも草は萠えなむ春日野をたゞ春の日にまかせたらなむ。
(6) おのが身はかへりみずして人のため盡くすぞ人の務なりける。
(9) 貌を正すは心を正す事なり。氣高く美しき姿勢をとれるときは、心おのづから氣高く美しくなるべし。貌を亂し姿を崩す時は自ら亂れ來る。古人が禮儀を重んじたるは、この理を知り居たればなり。

四、次の文中の助動詞の接續に就いて説明せよ。

(1) (イ) こゝにをられし人。こゝにゐられし人。
(ロ) 著物を著させよう。著物を著せさせよう。（口語）
(ハ) 行末が案ぜられる。行末が案じられる。（口語）
(2) うなぎ釣る舟たゞ一つありしかど、いつしかそれも見えずなりけり。
(3) 速に首を刎ねらるべう候。

五、次の語に「とも」「ども」をつけ假定と既定との形を示せ。

(イ) 樂し　(ロ) 勉强す　(ハ) 櫻なり　(ニ) 行く　(ホ) 捨つ

六、次の文中誤あらば正し、其の理由をいへ。

(1) こういふ態度は、學生として恥ずべきでは無かろうか。（口語）

(2) そのぐらゐのことは、笑ふてすませたらよかろうと思ふ。
(3) あなたは今日はよふ歸つてゐらつしやいましたね。（口語）
(4) こんな靜かな部屋におり、これほど本を持つてゐながら積んでおくだけで、讀むでみやうといふ氣はないやうです。（口語）
(5) 夕飯を終つたら散歩にでかけましよう。
(6) 負ふた子に敎えられて淺瀨を渡る。（口語）
(7) そうなればかうしやうと考える。（口語）
(8) 氣の合ふた者四五人ぐらい行こうじやないか。（口語）
(9) 松葉が一面に浮かむで水を蔽ふてゐるので、一寸池があるように見へ無い。（口語）
(10) よおこそお出で下さいまして、ありがとふございます。（口語）
(11) 若し少しにても心をゆるむれば、忽ち他に惑はせられて、多年の苦心は全く水泡と消へ失せぬ。
(12) 汝自ら爲し得ざることは之を人に强ふるべからず。
(13) 任重ふして負荷に堪えず。
(14) 迎へり　這へり　尋ねり　死ねり　集めり　射れり　命ぜり

七、次の文の構成（主語・述語等）を指示し、其の文の種類をいへ。

(1) 今年は枝が折れるほど實がなりました。（口語）
(2) 彼は何時もとは相手の樣子が違つてゐることに氣付いた。（口語）
(3) 二月十一日、國民は誰でもこのめでたい日を祝はぬ者はない。（口語）
(4) 札幌あたりでは、春が遲く來るので、五月の中頃にやうやく櫻の花が咲く。（口語）
(5) 智恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまでに類のない珍しい罪人が高瀨舟に載せられた。（口語）

(6) 友よ、父上は、君の卒業する日を指折り數へて待ち居給はん。

(7) 慾深き人は其の心いつも貧しく、欲なき人は其の心常に富めり。

中學新國文典

上級用終

附錄　文法上許容ニ關スル事項

一　「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ。

二　「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

三　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ。

例　火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四　「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ。

五　「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ(セ)ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六　「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

ナシ。

例　罪サル。

　　許サル。

　　解釋サル。

七　「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ。

例　最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

　　上下貴賤ノ別ナク各〻其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八　佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

　　攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九　てにをはノ「ノ」ハ動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ連續スルモ妨ナシ。

例　花ヲ見ルノ記。

　　學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇　疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例　有ルヤ。

　　面白キヤ。

　　父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一　てにをはノ「トモ」ノ動詞・使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　數百年ヲ經ルトモ。

　　如何ニ批評セラルヽトモ。

　　强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一二　てにをはノ「ト」ノ動詞・使役ノ助動詞・受身ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　月出ヅルト見エテ。

　　嘲弄セラルヽト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

一三　語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例　月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四　上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例　誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五　てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ。

例　何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ附スルモ(スルトモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六　「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　イハユル哺乳獸ナルモノ。

顏回ナルモノアリ。

サ變	カ變	下一段	下二段															
		カ	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア		
爲	來	蹴る	植う	枯る	消ゆ	譽む	述ぶ	堪ふ	兼ぬ	撫づ	捨つ	混ずず	載すす	投ぐぐ	受くく	得		
(す)	(く)	(け)	う	か	き	ほ	の	た	か	な	す	ま	の	な	う	(う)		
せ	こ	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え		
し	き	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え		
す	く	ける	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う		
する	くる	ける	うる	るる	ゆる	むる	ぶる	ふる	ぬる	づる	つる	ずる	する	ぐる	くる	うる		
すれ	くれ	けれ	うれ	るれ	ゆれ	むれ	ぶれ	ふれ	ぬれ	づれ	つれ	ずれ	すれ	ぐれ	くれ	うれ		
せよ	こよ	けよ	ゑよ	れよ	えよ	めよ	べよ	へよ	ねよ	でよ	てよ	ぜよ	せよ	げよ	けよ	えよ		

サ變	カ變	下一段														
		ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	
爲る	來る	植ゑる	枯れる	消える	譽める	述べる	堪へる	兼ねる	撫でる	捨てる	混ぜる	載せる	投げる	受ける	得る	
(爲)	(來)	う	か	き	ほ	の	た	か	な	す	ま	の	な	う	(え)	
せ	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	
する	くる	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	える	
する	くる	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	える	
すれ	くれ	ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ	てれ	ぜれ	せれ	げれ	けれ	えれ	
せよ ろ	こい	ゑよ(ろ)	れよ(ろ)	えよ(ろ)	めよ(ろ)	べよ(ろ)	へよ(ろ)	ねよ(ろ)	でよ(ろ)	てよ(ろ)	ぜよ(ろ)	せよ(ろ)	げよ(ろ)	けよ(ろ)	えよ(ろ)	

第一表　動詞活用表

文語

種類	行	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	カ	書く	か／く	か	き	く	く	け	け
四段	サ	漕ぐ	が／ぐ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
四段	タ	打つ	た／つ	た	ち	つ	つ	て	て
四段	ハ	買ふ	は／ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
四段	マ	飛ぶ	ば／ぶ	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
四段	ラ	讀む	ま／む	ま	み	む	む	め	め
四段	ラ	降る	ら／る	ら	り	る	る	れ	れ
ナ變	ナ	死ぬ	な／ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ變	ラ	有り	あ／り	あ	り	り	る	れ	れ
上二段	カ	起き	か／き	か	き	く	くる	くれ	きよ
上二段	ガ	過ぎ	が／ぎ	が	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
上二段	タ	落ち	た／ち	た	ち	つ	つる	つれ	ちよ
上二段	ダ	閉ぢ	だ／ぢ	だ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
上二段	ハ	強ひ	は／ひ	は	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
上二段	ナ	似に	な／に	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	によ
上二段	マ	延べ	ま／べ	ま	べ	む	むる	むれ	めよ
上二段	ヤ	試み	や／み	や	み	む	むる	むれ	みよ
上二段	ラ	老い	ら／い	ら	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
上二段	ワ	懲り	わ／り	わ	り	る	るる	るれ	りよ
上二段	ア	居る	あ／る	あ	い	ゐ	ゐる	ゐれ	ゐよ
上一段	ア	射る	い／る	い	い	る	る	れ	よ
上一段	カ	著る	き／る	き	き	る	る	れ	よ
上一段	ア	起る	お／る	お	き	る	る	れ	よ
上一段	ア	感る	お／る	お	い	る	る	れ	よ
上一段	ア	干る	ひ／る	ひ	ひ	る	る	れ	よ
上一段	ア	見る	み／る	み	み	る	る	れ	よ
上一段	ア	試みる	み／る	み	み	る	る	れ	よ
上一段	ア	延べる	べ／る	べ	び	る	る	れ	よ
上一段	ア	強ひる	ひ／る	ひ	ひ	る	る	れ	よ
上一段	ア	似る	に／る	に	に	る	る	れ	よ
上一段	ア	閉ぢる	ぢ／る	ぢ	ぢ	る	る	れ	よ
上一段	ア	落ちる	ち／る	ち	ち	る	る	れ	よ
上一段	ア	感じる	じ／る	じ	じ	る	る	れ	よ
上一段	ア	過ぎる	ぎ／る	ぎ	ぎ	る	る	れ	よ
上一段	ア	著る	き／る	き	き	る	る	れ	よ
上一段	ア	起きる	き／る	き	き	る	る	れ	よ
上一段	ア	射る	い／る	い	い	る	る	れ	よ
上一段	ア	居る	ゐ／る	ゐ	ゐ	る	る	れ	よ
下二段	ア	得る	え／る	え	え	る	る	れ	よ
下二段	カ	受く	く／く	く	き	く	くる	くれ	こよ
下二段	ガ	投ぐ	ぐ／ぐ	ぐ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ごよ
下二段	サ	載す	す／す	す	し	す	する	すれ	せよ
下二段	ザ	混ず	ず／ず	ず	じ	ず	ずる	ずれ	ずよ
下二段	タ	捨つ	つ／つ	つ	ち	つ	つる	つれ	つよ
下二段	ダ	撫づ	づ／づ	づ	ぢ	づ	づる	づれ	づよ
下二段	ナ	兼ぬ	ぬ／ぬ	ぬ	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬよ
下二段	ハ	堪へ	へ／へ	へ	へ	へ	へる	へれ	へよ
下二段	ハ	述ぶ	ぶ／ぶ	ぶ	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
下二段	マ	譽む	む／む	む	め	む	むる	むれ	めよ
下二段	ヤ	消ゆ	ゆ／ゆ	ゆ	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
下二段	ラ	枯る	る／る	る	れ	る	るる	るれ	れよ
下二段	ワ	植う	う／う	う	え	う	うる	うれ	えよ
下一段	カ	蹴る	け／る	け	け	る	る	れ	よ
カ變	來	來	く／く	こ	き	く	くる	くれ	こよ
サ變	爲	爲	す／す	せ	し	す	する	すれ	せよ

口語

種類	行	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	カ	書く	か／く	か	き	く	く	け	け
四段	サ	漕ぐ	が／ぐ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
四段	タ	打つ	た／つ	た	ち	つ	つ	て	て
四段	ナ	死ぬ	な／ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
四段	ハ	買ふ	は／ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
四段	マ	飛ぶ	ば／ぶ	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
四段	マ	讀む	ま／む	ま	み	む	む	め	め
四段	ラ	降る	ら／る	ら	り	る	る	れ	れ
四段	ラ	有る	あ／る	あ	り	る	る	れ	れ
上一段	カ	著る	き／る	き	き	る	る	れ	よ
上一段	カ	起きる	き／る	き	き	る	る	れ	よ
上一段	ア	射る	い／る	い	い	る	る	れ	よ
上一段	ア	感る	お／る	お	い	る	る	れ	よ
上一段	ア	干る	ひ／る	ひ	ひ	る	る	れ	よ
上一段	ア	見る	み／る	み	み	る	る	れ	よ
上一段	ア	試みる	み／る	み	み	る	る	れ	よ
上一段	ア	延べる	べ／る	べ	び	る	る	れ	よ
上一段	ア	強ひる	ひ／る	ひ	ひ	る	る	れ	よ
上一段	ア	似る	に／る	に	に	る	る	れ	よ
上一段	ア	閉ぢる	ぢ／る	ぢ	ぢ	る	る	れ	よ
上一段	ア	落ちる	ち／る	ち	ち	る	る	れ	よ
上一段	ア	感じる	じ／る	じ	じ	る	る	れ	よ
上一段	ア	過ぎる	ぎ／る	ぎ	ぎ	る	る	れ	よ
上一段	ア	著る	き／る	き	き	る	る	れ	よ
上一段	ア	起きる	き／る	き	き	る	る	れ	よ
上一段	ア	射る	い／る	い	い	る	る	れ	よ
上一段	ア	居る	ゐ／る	ゐ	ゐ	る	る	れ	よ
下一段	ア	得る	え／る	え	え	る	る	れ	よ
カ變	來	來	く／く	こ	き	く	くる	くれ	こよ
サ變	爲	爲	す／す	せ	し	す	する	すれ	せよ
									しろよ

第一表　動詞活用表

サ變	カ變	下一段	段二下	段一上	段二上	ラ變	ナ變	段四	種類	文語
		カ	ワ ラ ヤ マ バ ハ ナ ダ タ ザ サ ガ カ ア	ワ マ ハ ナ カ ア	ラ ヤ マ バ ハ ダ タ ガ カ			ラ マ バ ハ タ サ ガ カ	行	
爲	來	蹴る	植 枯 消 譽 述 堪 兼 撫 捨 混 載 投 受 得 う る ゆ む ぶ ふ ぬ づ つ ず す ぐ く	居 見 干 似 著 射 る る る る る る	懲 老 試 延 强 閉 落 過 起 る ゆ む ぶ ふ づ つ ぐ く	有 り	死 ぬ	降 讀 飛 買 打 押 漕 書 る む ぶ ふ つ す ぐ く	語	
(す)	(く)	(け)	う か き ほ の た か な す ま の な う (う)	(ゐ) (み) (ひ) (に) (き) (い)	こ お こころ の し と お す お	あ	し	ふ よ と か う お こ か	語幹/語尾	
せ	こ	け	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	ゐ み ひ に き い	り い み び ひ ぢ ち ぎ き	ら	な	ら ま ば は た さ が か	未然	語
し	き	け	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	ゐ み ひ に き い	り い み び ひ ぢ ち ぎ き	り	に	り み び ひ ち し ぎ き	連用	
す	く	ける	う る ゆ む ぶ ふ ぬ づ つ ず す ぐ く う	ゐ る み る ひ る に る き る い る	る ゆ む ぶ ふ づ つ ぐ く	り	ぬ	る む ぶ ふ つ す ぐ く	終止	
する	くる	ける	う る ゆ む ぶ ふ ぬ づ つ ず す ぐ く う る る る る る る る る る る る る る る	ゐ る み る ひ る に る き る い る	る ゆ む ぶ ふ づ つ ぐ く る る る る る る る る る	る	ぬる	る む ぶ ふ つ す ぐ く	連體	
すれ	くれ	けれ	う れ る れ ゆ れ む れ ぶ れ ふ れ ぬ れ づ れ つ れ ず れ す れ ぐ れ く れ う れ	ゐ れ み れ ひ れ に れ き れ い れ	る れ ゆ れ む れ ぶ れ ふ れ づ れ つ れ ぐ れ く れ	れ	ぬれ	れ め べ へ て せ げ け	已然	
せ よ	こ よ	け よ	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ	ゐ み ひ に き い よ よ よ よ よ よ	り い み び ひ ぢ ち ぎ き よ よ よ よ よ よ よ よ	れ	ね	れ め べ へ て せ げ け	命令	

サ變	カ變	段一下	段一上	段四	種類	口語
		ワ ラ ヤ マ バ ハ ナ ダ タ ザ サ ガ カ ア	ワ ラ ヤ マ バ ハ ナ ダ タ ザ ガ カ ア	ラ マ バ ハ ナ タ サ ガ カ	行	
爲	來	植 枯 消 譽 述 堪 兼 撫 捨 混 載 投 受 得 ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	居 懲 老 見 試 延 干 强 似 閉 落 感 過 著 起 射 る る る る み る る ひ る る ぢ る る じ る る き る る	有 降 讀 飛 買 死 打 押 漕 書 る る む ぶ ふ ぬ つ す ぐ く	語	
(爲)	(來)	う か き ほ の た か な す ま の な う (え)	(ゐ) こ お (み) こころ の (ひ) し (に) と お 感 す (き) お (い)	あ ふ よ と か し う お こ か	語幹/語尾	
せ し	こ	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	ゐ り い み み び ひ ひ に ぢ ち じ ぎ き き い	ら ら ま ば は な た さ が か	未然	口語
し	き	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	ゐ り い み み び ひ ひ に ぢ ち じ ぎ き き い	り り み び ひ に ち し ぎ き	連用	
する	くる	ゑ る れ る え る め る べ る へ る ね る で る て る ぜ る せ る げ る け る え る	ゐ る り る い る み る み る び る ひ る ひ る に る ぢ る ち る じ る ぎ る き る き る い る	る る む ぶ ふ ぬ つ す ぐ く	終止	
する	くる	ゑ る れ る え る め る べ る へ る ね る で る て る ぜ る せ る げ る け る え る	ゐ る り る い る み る み る び る ひ る ひ る に る ぢ る ち る じ る ぎ る き る き る い る	る る む ぶ ふ ぬ つ す ぐ く	連體	
すれ	くれ	ゑ れ れ れ え れ め れ べ れ へ れ ね れ で れ て れ ぜ れ せ れ げ れ け れ え れ	ゐ れ り れ い れ み れ み れ び れ ひ れ ひ れ に れ ぢ れ ち れ じ れ ぎ れ き れ き れ い れ	れ れ め べ へ ね て せ げ け	假定	
せ ろよ	こ い	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ)	ゐ り い み み び ひ ひ に ぢ ち じ ぎ き き い よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ) よ(ろ)	れ れ め べ へ ね て せ げ け	命令	

第二表

形容詞活用表

	種類	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
文語	ク活用	高し	たか／く	く	く	し	き	けれ	
	シク活用	樂し	たのし／く	く	く		き	けれ	
口語	ク活用	高い	たか／い		く	い	い	けれ	
	シク活用	樂しい	たのし／い						

形容動詞活用表

	種類	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
文語	カリ活	高かり（烈しかり）	高し／烈し	から	かり		かる		かれ
	ナリ活	靜かなり	靜か	なら	なり／に	なり	なる	なれ	なれ
	タリ活	堂々たり	堂々	たら	たり／と	たり	たる	たれ	たれ
口語	第一	高い（烈しい）	高／烈し	から	かつ				
	第二	靜かだ	靜か	だら	だつで／に	だ	な	なら	
		靜かです	靜か	でせ	でし	です			

第三表

文語動詞活用識別表

上一段	射る　鑄る　著る　似る　煮る　干る　見る（顧みる・惟みる・鑑みる・試みる）　居る　率ゐる
下一段	蹴る
カ變	く（來）
サ變	す（爲）　他語にすがついたもの
ナ變	死ぬ　往ぬ
ラ變	有り　居り　侍り
四段	打消のずが五十音圖のアの段の音につく
上二段	打消のずが五十音圖のイの段の音につく
下二段	打消のずが五十音圖のエの段の音につく

文語動詞假名遣識別表

ア行	射る　鑄る……上一段 得……下二段
ワ行	居る　率ゐる……上一段 植う　飢う　据う……下二段
ヤ行	老ゆ　悔ゆ　報ゆ……上二段 其の他の甘ゆ　嘶ゆ　癒ゆ等　終止形がゆとなるもの……下二段
ハ行	右の外
ザ行	混ず……下二段 サ變の語尾の濁るもの
ダ行	右の外

	種類	音	て（で）	たり（だり）
動詞		イ音便	き	咲いて	咲いたり
形容詞				かな・して	悲しいかな

第三表

文語動詞活用識別表

上一段	射る　鑄る　著る　似る　煮る　干る　見る（顧みる・惟みる・鑑みる・試みる）　居る　率ゐる
下一段	蹴る
カ變	く（來）
サ變	す（爲）　他語にすがついたもの
ナ變	死ぬ　往ぬ
ラ變	有り　居り　侍り
四段	打消のずが五十音圖のアの段の音につく
上二段	打消のずが五十音圖のイの段の音につく
下二段	打消のずが五十音圖のエの段の音につく

文語動詞假名遣識別表

ア行	射る　鑄る……上一段 得……下二段
ワ行	居る　率ゐる……上一段 植う　飢う　据う……下二段
ヤ行	老ゆ　悔ゆ　報ゆ……上二段 其の他の甘ゆ　嘶ゆ　癒ゆ等　終止形がゆとなるもの……下二段
ハ行	右の外
ザ行	混ず……下二段 サ變の語尾の濁るもの
ダ行	右の外

文語用言音便表

	種類	音		
動詞		て（で）	た（だり）	
動詞	イ音便	き	咲いて	咲いたり
動詞	イ音便	ぎ	泳いで	泳いだり
動詞	ウ音便	く		高うして
動詞	ウ音便	ひ	問うて	問うたり
動詞	撥音便	に	死んで	死んだり
動詞	撥音便	び	飛んで	飛んだり
動詞	撥音便	み	踏んで	踏んだり
動詞	促音便	（き）	（行って）	（行ったり）
動詞	促音便	ち	勝って	勝ったり
動詞	促音便	ひ	買って	買ったり
動詞	促音便	り	賣って	賣ったり
形容詞			かな・して	

願望	たし	たく	たく	たし	たき	たけれ		連用
	まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ		未來ト同ジ
推量	らし		らしく	らし	らしき			終止(ラ變ハ連體)
	べし	べく	べく	べし	べき	べけれ		
	めり			めり	める	めれ		
	らむ			らむ	らむ	らめ		
	けむ			けむ	けむ	けめ		過去ト同ジ
	まし			まし	まし	ましか		未來ト同ジ
詠嘆	なり			なり	なる	なれ		終止(ラ變ハ連體)
	けり			けり	ける	けれ		過去ト同ジ
指定	なり	なら	なり	なり	なる	なれ		連體・體言
	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	體言
比況	如し	如く	如く	如し	如き			連體・體言・助詞(が・の)
願望	たい		たく	たい	たい	たけれ		連用
	たがる	たがら	たがり	たがる	たがる	たがれ		
推量	らしい		らしく	らしい	らしい			終止・體言
	まい			まい				打消ト同ジ
	さうだ	さうだら	さうだつ さうで さうに	さうだ	さうな	さうなら		終止・連用
	さうです	さうでせ	さうでし	さうです				
詠嘆								
指定	だ	だら	だつ で	だ	な	なら		體言・助詞
	です	でせ	でし	です				連體
比況	やうだ	やうだら	やうだつ やうで やうに	やうだ	やうな	やうなら		連體・動詞(の)
	やうです	やうでせ	やうでし	やうです				

第四表

助動詞の種類・活用及び接續表

種類	語/活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
文語	受身	る らる	れ られ	る らる	る らるる	れ らるれ	れ られよ	未然(四段・ナ變・ラ變) 未然(右以外)
	可能	る らる べし べかり	れ られ べく べから	る らる べし	る らるる べき	れ らるれ べけれ		右同 推量ト同ジ
	使役	す さす しむ	せ させ しめ	す さす しむ	する さする しむる	すれ さすれ しむれ	せよ させよ しめよ	未然(四段・ナ變・ラ變) 未然(右以外) 未然
	尊敬	る らる す さす しむ	れ られ せ させ しめ	る らる す さす しむ	る らるる する さする しむる	れ らるれ すれ さすれ しむれ	れよ られよ せよ させよ しめよ	受身使役ト同ジ
	打消	ず ざり じ まじ	ず ざら ざり まじく	ず じ まじ	ぬ ざる じ まじき	ね ざれ じ まじけれ		未然 終止(ラ變ハ連體)
	時 未來	む		む	む	め		未然
	時 完了	ぬ つ たり り	な て たら たり	ぬ つ たり り	ぬる つる たる る	ぬれ つれ たれ	ね てよ	連用(ナ變ニハツカズ) 連用 已然(四段未然サ變)
	時 過去	き けり		き けり	し ける	しか けれ		連用(カ變・サ變ニ特例アリ) 連用
	願望	たし まほし	たく まほしく	たし まほし	たき まほしき	たけれ まほしけれ		連用 未來ト同ジ
	推量	らし べし めり らむ けむ まし		らし べし めり らむ けむ まし	らしき べき めるめる らむらむ けむけむ ましか	べけれ めれ めめ けめ ましか		終止(ラ變ハ連體) 過去ト同ジ 未來ト同ジ
	嘆	なり けり		なり けり	なる ける	なれ けれ		終止(ラ變ハ連體) 過去ト同ジ
	指定	なり たり	なら たり	なり たり	なる たる	なれ たれ	たれ	連體・體言 體言
	比	如し	如く	如し	如き			連體・體言(ノ)
口語	語/活用	未然	連用	終止	連體	假定	命令	接續
	受身	れる られる	れ られ	れる られる	れる られる	れれ られれ	れよ られよ	未然(四段) 未然(右以外)
	可能	れる られる	れ られ	れる られる	れる られる	れれ られれ		右同
	使役	せる させる	せ させ	せる させる	せる させる	せれ させれ	せよ させよ	右同
	尊敬	れる られる ます	れ られ ませ	れる られる ます	れる られる ます	れれ られれ ますれ	れよ られよ ませ	右同 連用
	打消	ぬ ない まい	ず なく まい	ぬ(ん) ない まい	ぬ(ん) ない まい	ね なけれ		未然(有ルニハツカヌ) 終止(四段未然)(右以外未然)
	時 未來	う よう		う(う) よう(よう)				未然(四段) 未然(右以外)
	時 完了	た	たら	た	た	たら		連用
	時 過去							
	願望	たい たがる	たく たがり	たい たがる	たい たがる	たいけれ たがれ		連用
	推量	らしい まい さうだ さうです	らしく さうで さうでし	らしい まい さうだ さうです	らしい さうだ さうな	さうなら		終止・體言 打消ト同ジ 終止・連用
	嘆							
	指定	だ です	だら でせ	だ です	な	なら		體言・助詞 連體
	比	やうだ	やうだら やうで やうに	やうだ やうです	やうな	やうなら		連體・動詞(の)

第四表

助動詞の種類・活用及び接續表

種類	語／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
文語	受身	る	れ	る	る	れ	れよ	未然（四段・ナ變・ラ變）未然（右以外）
		らる	られ	らる	らるる	られ	られよ	
	可能	る	れ	る	る	れ	れよ	右同
		らる	られ	らる	らるる	られ		
		べし	べく	べし	べき	べけれ		推量ト同ジ
		べからず	べかり					
	使役	す	せ	す	する	すれ	せよ	未然（四段・ナ變・ラ變）未然（右以外）
		さす	させ	さす	さする	さすれ	させよ	
		しむ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	未然
	尊敬	る	れ	る	る	れ	れよ	受身使役ト同ジ
		らる	られ	らる	らるる	られ	られよ	
		す	せ	す	する	すれ	せよ	
		さす	させ	さす	さする	さすれ	させよ	
		しむ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	
	打消	ず	ず	ず	ぬ	ね	ざれ	未然
		ざり	ざり	じ	ざる	ざれ		
		じ	じ	じ	じ	じ		
		まじ	まじく	まじ	まじき	まじけれ		終止（ラ變ハ連體）
	完了	ぬ	な	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	連用（ナ變ニハツカズ）
		つ	て	つ	つる	つれ	てよ	連用
		たり	たり	たり	たる	たれ		已然（四段未然サ變）
		り	り	り	る	れ		
	未來	む		む	むる	めれ		未然
	過去	き		き	し	しか		連用（カ變・サ變ニ特例アリ）
		けり		けり	ける	けれ		
	願望	たし	たく	たし	たき	たけれ		連用
		まほし	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ		未來ト同ジ
	推量	らし		らし	らしき			終止（ラ變ハ連體）
		べし	べく	べし	べき	べけれ		
		めり	めり	めり	めるる	めれ		
		らむ		らむ	らむる	らめ		
		けむ		けむ	けむる	けめ		過去ト同ジ
		まし	まし	まし	ましき	ましか		未來ト同ジ
	詠嘆	なり		なり	なる	なれ		終止（ラ變ハ連體）過去ト同ジ
		けり		けり	ける	けれ		
	指定	なり	なら	なり	なる	なれ		連體・體言
		たり	たり	たり	たる	たれ		體言
	比況	如し	如く	如し	如き			連體・體言助詞（が・の）
口語	受身	れる	れ	れる	れる	れ	れよ	未然（四段・ナ變・ラ變）未然（右以外）
		られる	られ	られる	られる	られ	られよ	
	可能	れる	れ	れる	れる	れ	れよ	右同
		られる	られ	られる	られる	られ		
	使役	せる	せ	せる	せる	せれ	せよ	右同
		させる	させ	させる	させる	させれ	させよ	
							させろ	
	尊敬	れる	れ	れる	れる	れれ	れよ	右同
		られる	られ	られる	られる	られれ	られよ	
		ます	ませ	ます	まする	ますれ	ませ	連用
			まし			ますれ	ませ	
	打消	ぬ		ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね		未然（有るニハツカヌ）
		ない	なく	ない	ない	なけれ		
		まい		まい				終止（四段）未然（右以外）
	完了	た	たら	た	た	たら		連用
	未來	う		う	う			未然（四段）未然（右以外）
		よう		よう	よう			
	過去							
	願望	たい	たく	たい	たい	たけれ		連用
		たがる	たがら	たがる	たがる	たがれ		
	推量	らしい		らしい	らしい			終止・體言
		まい		まい				打消ト同ジ
		さうだ	さうだら	さうだ	さうだつ			終止・連用
			さうで		さうで			
			さうに		さうに			
		さうです	さうでせ	さうです	さうでし			
	詠嘆							
	指定	だ	だら	だ	だつ			體言・助詞
		です	でせ	です	でし			連體
		やうだ	やうだら	やうだ	やうだつ			連體・動詞（の）
			やうで		やうで			
			やうに		やうに			
		やうです	やうでせ	やうです	やうでし			
	比況							

文部省檢定濟
昭和十二年十一月二日　中學校國語漢文科

昭和十二年五月十九日印刷
昭和十二年五月二十四日發行
昭和十二年十月十三日訂正再版印刷
昭和十二年十月十八日訂正再版發行

【中學新國文典　上級用】
定價金五拾八錢

著作權所有

著作者　廣島高等師範學校附屬中學校　國語漢文研究會

發行兼印刷者　大阪市西區立賣堀南通三丁目二十一番地　京極喜太郎

發行所　東京市赤坂區新坂町六十八番地　大阪市西區立賣堀南通三丁目　掘替口座大阪八六〇四五番　京極書店

發賣所　大阪市東區北久太郎町四丁目　柳原書店

常極書屋

四八 保田富 三二

庫
37
514
広島大学図書
2000081514